
魔法少女リリカルなのは 異能者達の伝説

バーダック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 異能者達の伝説

【Nコード】

N5986V

【作者名】

バーダック

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはの世界観にオリキャラとオリジナル設定を加えた二次創作モノです

かなりの駄文ですが読んでいただけると嬉しく思います

プロローグ（前書き）

生まれ変わりました

プロローグ

とある山奥：この山奥には今はもう誰も住んでいない人々からは忘れられた神社がたっていた

だが、そんな神社に 一人の少年と一匹の猫が暮らしていた
どという経歴があつたのかは不明だが ただわかるのは彼等には不思議な力が備わっていた

そして、彼等は 妖怪と呼ばれる者たちを専門に 商売をしていた
少年の名はリンク そして、猫の名は 猫またのユウ

彼等は あるモノを調査して欲しいと 妖怪達から依頼された

何でも ニヶ月程前に空から謎の光石が幾つも落ちてきたらしい
しかも、その石は、かなり危険なものらしい
リンク達はその依頼を引き受け 見つけた場合 すぐに封印するた
めに街へとおりた

そして、二人の 少女達と出逢う

第一話 魔法少女とジュエルシード

町に降りたりリンク達だが、これといった 情報も得られずに今、ト
ポトボとふらついていた

日は落ち辺りはもう完全に暗くなっていた

「……………第一実物を見たことにやいのに どうやって探すつもりだ
つたんにゃ？」

「……………勘」

ユウの質問にリンクがそんなことをほざいたので、ユウは思いつき
りリンクの顔面に頭突きをかました

「ブッ!!何すんだ!!」

「勘て……………お前はあほかにゃ!!」

「何とかなると思ってたんだよ!!」

「にやるか!!」

前向きなのか ただのアホなのか とにかくリンクはたまにこうい
う事をする そのたびに、呆れたユウがリンクにツッコミをかま
し言い争う

最早、二人の間で お約束みたいになっていた
だが、リンクの勘も捨てたものではなかった

「……………!?!」

不意に二人は何かの力を感じた二人は 急いでそこに向かった

すると、何やら杖のようなものを持った女の子が、黒い怪物と対峙していた。足元にはイタチの様な動物がいる。

「…ふえええ？」

いや、女の子の方は後ずさっているから、対峙しているというよりは困惑している感じだ。
すると、怪物は物凄い勢いで女の子に襲いかかった。

「！…させるかぁ！」

リンクの掌から、青白い光の弾を思いっきり怪物にぶん投げた。

「…む！…なに！？」

光弾が怪物に当たった瞬間、怪物の体は粉々に弾けとび、辺り一帯に突き刺さった。

リンク達は、色々と気になったが今は無視して女の子に駆け寄った。

「……大丈夫か！？」

「……ふえ？あなたは？」

「そんなことはどうでもいい！ペットを連れて早くにげる！！」

リンクが女の子に逃げるように促していると

「待つて！！」

不意に二人の足元から声が聞こえてきた。

「…ジュエルシードを封印しないと ヤツは追ってくる…」

「…喋った！？お前 妖怪だったのか！？」

「………妖怪って何？」

女の子とイタチは、首を傾ながらそう言った

「…今は、そんなに話は後にするにや！…来るぞ！！」

いつの間にか 元に戻った怪物が またも襲いかかってきた

「ちいっ！！」

「…うわ！？」

「…にやあ！？」

リンクは、瞬時にイタチをすくいあげ、女の子の腰に手を回し、思いつき後ろに跳んで怪物の 攻撃をかわした

「…くっ 何なんだ あれは！？」

「…あれは 忌まわしい力によって生み出されてしまった思念体です その杖で封印して元の姿に戻さないかぎり倒す事は出来ません」

「…ふえ？杖ってこのレイジングハートのことだよね？……えっと…それって…」

「はい、アレを封印するには貴女の力が必要です!」

「ふええう!??ど、どうすれば良いの!??」

「それは……………!」

イタチがその方法を教えようとした時、怪物が再度三人に襲いかかってきた

「ふしやあああ!!!」

しかし 赤黒いオーラを纏ったユウが怪物に体当たりし、吹っ飛ばした

「……………すごい! あなたたちは一体……………」

「……………どうやら、君が言ったことは本当みたいだな 俺達が時間を稼ぐ!」

リンクはそう言うと、イタチを女の子に預け 怪物の方へと突っ込んでいった

「はっ!?! 時間を稼ぐって……………」

「は、早く封印しないとあの人達が危ないの! どうすれば良いのか教えて!」

「わっ分かった! 簡単に説明すると……………心をすませて浮かび上がった呪文を唱えるんだ」

「……………心をすませる……………」

女の子は そう言って目を閉じた

「……落ち着いて……その呪文は君だけにしかわからないんだ」

「……私だけの呪文………わかったの！リリカルマジカル！」

「封印すべきは忌まわしき器 ジュエルシード」

女の子が、呪文を唱えた瞬間 杖から桃色の鞭のようなものが伸びて、怪物に巻き付いた

「「ん？、うお！？、あぶねえ！！」」

…近くにいた リンク達まで 巻き込みそうになったのは多分気のせいだろう…

「リリカルマジカル シリアルナンバー？？？封印」

幾つもの 桃色の光が怪物を貫き怪物は消滅した

そして、怪物がいたところには、青白い光の石が転がっていた

「それが、ジュエルシードだよ レイジングハートで触ってみて」

そう言われ女の子が杖で触れると ジュエルシードと呼ばれる石は、杖のなかに吸い込まれた

「………終わりなの？」

「うん、封印完了だ」

「「………ほほう！それは良かったな（にゃ）！！」」

「……えっと…何だか、二人（？）とも 顔が怖いよ？……」

「…危つく巻き込まれかけたんだ！お前は 俺達を殺す気か！！」
「」

「……ふにゃあ ごふえんふあふあい！（ごめんなさい）」

リンクが女の子の両頬を引っ張り、女の子が、涙目になりながら謝っている 不意に糸が切れたように イタチが倒れた

「「大丈夫！？」」

「…気を失っただけにゃ それより ここから早く離れた方が良さそうにゃ」

「……ああ そうだな」

辺りを見ると、地面は抉れ電柱は傾いている

「…もしかして ここに私たちがいると 非常にまずい？」

「………」

「………」

リンクはユウを、女の子はイタチを、それぞれ抱え

「………逃げるぞー！！」

「！」「！」「めんなさいー！！」

全力でその場を離れた

第二話 自己紹介（前書き）

新たなオリキャラがでてきます

第二話 自己紹介

リンク達は今、近くの公園に逃げてきていた

「……よし、ここなら大丈夫だろ」

「……はぁ……はぁ……疲れたの」

女の子の方は かなり息を切らしている

「大丈夫か？……とりあえず、少し休むか」

リンクは、そう言う公園のベンチへと歩いていった女の子も後に続き 二人ともベンチに座った

「……う……うーん……」

「気がついた？」

「……ここは……そうだ、僕はあのあと気を失って……」

「……大丈夫か？」

「……はい、あなた達のおかげで助かりました 傷も残った魔力で治せましたし……」

（（……魔力？））

聞きなれない単語にリンクとユウは首を傾げた

「……あの、本当に申し訳ありません 皆さんを巻き込んでしまっ

て……」

「にゃはは 気にしないで 君が無事でよかったよ」

「……でも、……本当にごめんなさい」

「……… ねえ、自己紹介しようか？……私の、名前は高町なのは、皆は なのはって呼ぶの」

「……ユーノ……ユーノ・スクライア……あっスクライアは部族名だから 名前はユーノだよ」

「……ユーノ君か 可愛い名前だね……」

そう言つて、なのははリンク達の名前も聞こうと 隣をみた

「……今考えたら 俺達かにやり大胆な事をしてしまったにゃ……」

「……ど、どうしよう てつきり俺達と同じかと思っただけど 何か違うみたいだ」

「……魔力にゃんて力、俺は、知らにゃいにゃ」

「……俺だつて知らないよ……… 気になるけど……」

「……… 迂闊に聞いてしまったら 俺達の素性も話さにゃければにゃらにゃくにゃる………ここは適当に相手してさっさと帰るぞ」

「……… 御意」

が……何やらボソボソと作戦会議をしていた

「……あのお……」

「は、はい!」

「にゃ、にゃんだ?」

「……えっと……お名前を教えてくださいの」

「あ、ああ 俺の名はリンク で、こっちがユウだ……二人はなのはちゃんにユーノ君でいいんだな?」

「うっうん」

何やら狼狽えまくっている二人に、なのはも若干狼狽してしまう

「……それよりも君達は何者なんだ?」

「あつそれは私も、気になったの、喋る猫さんって事はユーノ君の仲間なの?」

「……いや、僕は一人できた ……それに 君達からは魔力とは違う何かを感じる」

迂闊に聞かなくてもユーノとなのはがリンク達の素性を聞いてきた

「……き、禁則事項だ(にゃ)」

まだ狼狽えまくっていたリンク達は、何処かで聞いたことのあるセリフをほざいた

「……………」

「……と、とにかく教えられない……ほら、もう遅いし帰らないと家族が心配するぞ」

リンクは、強引に会話を打ち切り　なのはの手をとって公園の出口まで歩き始めた

「きゃ！……あの……」

「君の家は何処だ？送っていくよ」

「……女の子の一人歩きはあぶにやいからにやあ」

いきなり手を引かれた事で驚いたのはだが、聞いても答えてくれそうにないことを悟り、これ以上は聞かないことにした

……ユーノは　聞きたそうにしていたが……

それから、なのは達を送りリンク達は、自分の住みかへと戻ろうとしていた

「……ああ　何かどつと疲れた……」

「……全くな　まあ、もう終わったし、あの娘たちとも会うことはにやいだろう」

「……そうだといいけどな……」

「どうかしたのか？」

「いや、何かこれで終わりじゃない気がするんだよなあ」

「……よせにや 俺達の力が通じない奴がまだいるにやんて考えた
くにゃいにゃ」

「……まあ 倒すんじゃないくて封印するんだが……あのジュエルシー
ドつての俺達じゃ封印できないのかな？」

「……難しいだろうにや……」

「………そうか」

と、少し暗い感じでそんなことは話ながら リンクが神社の中に入
ろうとすると

「リンク~~~~~!!」

一人の女性が勢いよくリンクに抱きつき………もとい突っ込んできた

「へぶんっ!~!~!」

これにはリンクも対応できず、もろ溝内にタックルをかまされてし
まう

「……………デッデルフか？」

「はい!~ヒドイですよリンク この私を置いていくなんて」

デルフと呼ばれた少女は上体を起こし腕を組 頬を膨らませながら
プンプンと怒っていた

「……………いや、だって お前と一緒にいくと目立つから……………」

リンクがこう言う様に、デルフはかなり目立つのだ
年は高校生くらいで…金髪で腰くらいまで伸ばし…碧眼で顔立ちも整っている…

猫を肩に乗つけて歩いているだけで少し目立つというのに そのうえ、デルフまで連れていくと目立ちまくってしょうがない

「ええ 別にいいじゃないですか 私達のラブラブっぷりを世間に見せ付けてあげましょうよ」

そして、極めつけはこの性格…堂々と恥ずかしいことを言っではリンクを困らせている

「…どう見ても兄弟しか見えにやいって…」

小学生と高校生じゃ何処をどう見ても兄弟にしか見えない

「…ていつか 第一どこに行ってたんですか？」

「……………それを先に聞こうよ……………」

「…まあ、いいです こうして無事に帰ってきた訳ですから許しましょ……………」

「ああ ちょっと女の子とイタチの手助けをしてきた」

「……………ほう（ビキビキ）」

「…デ、デルフ？ 何ゆえ額に青筋を浮かべながら睨むのですか？」

「リンクゝ　すこゝしだけ面をかしてくださいねゝ」

「えっ？あつあれ？　許してくれるんじや……ご……ごめんなさい？
…何かわかんないけどごめんなさい？……たゝすゝけてゝ」

リンクは、デルフに首根っこを掴まれそのまま　住み処へと引きずられていった

「……………やれやれにゃ」

番外編 影の支配者（前書き）

主人公達 オリキャラしか出ません

番外編 影の支配者

次の日

「きゃああああー!!」

とある山奥にある神社
その庭でリンクとユウが稽古をしていると、神社の中からデルフの悲鳴が聞こえてきた

「どうした!？」

慌てて二人はデルフの元に駆け寄った

「……奴が……奴がでした……」

「しっかりしろ! 奴とは誰だ!？」

「………G………」

「……なん……だと」

「……バカにや……」

G: 人類が誕生する前からこの地に生息した
禍々しく黒光りしている体と、カサカサと音をたてながら高速で動くその姿は まさに影の支配者に相応しく 見るものに問答無用の嫌悪感を抱かせる

「くっ！！Gめ！どうやって何重もの結界を通り抜けてきた！？」

「……いや、Gにはどんなにやセキュリティも、通用しにやいにや！！」

Gの 恐るべき特殊能力その一 【絶対侵入能力】

Gには どのようなセキュリティも通用しない

例え それが、強力な結界であろうとも……

「……とにかく何とかしてくださいよ……」

余りの恐ろしさに涙を流しながらデルフが リンクにすがり付いた

「……何とかって言われても何処にいるか分かんないし……」

Gの恐るべき特殊能力その二 【忍】

一度見失うと見つけるのが困難（ていうか探したくない） しかし、

時折力サカサと音がするのでかなり怖い

「………とりあえず、………探すか………」

「………どうやって？」

「………物をはぐればでてくるだろう」

「だ、誰が？」

「………」

一度隠れてしまったGを探すのにはかなりの勇気がある

何度も、命懸けの戦いを経験してきたリンク達も例外ではない

「………ユウって猫の妖怪だったよな？……」

「おい！！にやにを考えてるにや！！嫌だぞ 絶対に！！！」

「……でも、猫って虫を捕りますし……」

「くらあー！！こういう時だけ 猫扱いするにやあー！！！」

Gの恐るべき特殊能力その三 【友情断殺】

Gの前では 友情も愛情も絆さえ意味をなさない

「……ええい！！こうにやったら全妖力を解放して……」

「わあー！！まてまて！そんなことしたら 俺達の住処がー！！……
……わっわかった！俺が、悪かったから 落ち着いてくれえー！！！」

……と言うより この三人がヘタレなだけだった

そんな、バカ共が、バカな事を言い合いながら、バカ騒ぎしていた
その時……

カサカサカサ

「……！！！！（ビツクうう）」「」「」

何処からともなくGのはい回る音が聞こえてきた

「……ヤバイ……マジ怖い」

「……ヘタレと呼ばれてもいいから、逃げたしたいにや」

「……ううう」

リンク達は、ヘタレ全開で三人寄り添いながらそんなことを言い出した（デルフに至っては半泣き状態でリンクにしがみついている）

「……このままでは埒があかない……アレを出すしかない」

「……アレとは？」

そう言うと、リンクは一枚の護符を取り出した

「……俺が、自分の所有物を御札に変えて持ち歩いているのは知っているだろ？」

その一つを今 解き放つ……『我が力を受けしモノよ 今こそあるべき姿へと、形を変えよ……』」

リンクは、護符を人差し指と中指の間に挟み、顔の前に立てると何やらブツブツと呟いた

「……現れよ……殺虫剤……！」

リンクがそう叫ぶと 青白い炎が護符を包み込み瞬く間に燃え尽きてしまった

そして、いつの間にかリンクの手には殺虫剤が握られ、リンクはそれを高らかに天にかざした

「……ま……だ……れ……？」

「……まあ、にやんていうか、能力の無駄遣いにや……」

「……ていうか、護符にして持ち歩いている意味がわかりませんね……」

そんな、リンクにユウ達は冷やかな視線を送った

「……………さあ！！覚悟しろよG！！！」

視線に堪えられなくなったのかリンクは逃げるように奥へと歩いていった

「……………はあ…リンクだけじゃ心もとにゃいにゃ…おいデルフ、お前は外に出ているにゃ」

ユウは そう言うと、リンクの元に駆け寄って行った

「……………うううう 無力です……………」

デルフは悔しそうに外に出ていった

「……………さてと、まず何処から探す？」

「……………適当に物を動かしてたら見つかるにゃ」

「……………それが、一番怖いんだが……………確か、この辺から音が聞こえてきたな……………！！…いたー！！！！！！！」

Gを見つけたのか リンクは、思いつきり殺虫剤をぶちかました

「おい！！よく見ろにゃ それは、Gじゃにゃい 只のゴミにゃ！！！」

Gの恐るべき特殊能力(?) その四 【疑心暗鬼】

とにかくGを見た後は 黒い物体に過剰に反応(怖れて)してしまう

「……むう 違ったか」

「……少し落ち着けにや」

「仕切り直し」

「……ここかな?…」

「……! ……いたにや!!」

「なに!?! ……くらえ……!!」

「なっ!? 聞いてにやい!?!」

Gの恐るべき特殊能力その五 【究極生命力】

しぶとい…とにかくしぶとい 強力な殺虫剤をぶちかましても死
ない ぶっ叩いても死なない

「いや、聞いてない訳じゃないんだ!! 何度も、当てれば死ぬはず
だ!」

そう言つて、再度攻撃しようとした

次の瞬間

バサ! ブーン!

「……!!?!?!?!」

いきなり、Gは禍々しい羽を開きもがくように無茶苦茶に飛び出した

予想外のGの行動にリンク達は、光の速さで後ろに跳んだ

Gの恐るべき特殊能力その六 【死なばもろとも】
飛ぶ…奴は飛ぶ……

そして、もがいている姿がマジで キモ怖い……

「……はぁ……はぁ……はぁ……ヤバイよ 近づけないよ……ていうか近づきたくない……」

「……いや、それよりもっとマズイ状況にや……見る！」

ユウがそう言って 顔で合図すると、そこには……

「……バカな！！質量を持った残像だと！？」

「違う！！どう見ても二匹いるにや！！」

Gの恐るべき特殊能力その七 【究極増殖】
一匹見たら十匹はいると思え

「……どうしようユウ 俺もう無理だよ……」

「……俺も あんにゃのチートにや…勝てる訳にゃいにや」

と、二人がまたヘタレ全開になった その時、救世主が現れた

長い手足に八本の足

そう、我等が軍曹の登場である

軍曹は、G並の足の速さでGに近付き

ガシッ！バク！！

そのままGの上に乗ると 八本の足で、Gを押さえつけ そして…

……

「「！！！？？」」

これには、リンク達もビックリである

……こうして、後に「G事件」と語られることになるこの事件は
我等が軍曹の活躍で幕を閉じた

一方、リンク達は、この事が軽いトラウマとなり

「なのは様あー！！ どうか、どうか、このヘタレめを一晚だけ泊
めてくださいー！！」

「ふえええー！？」

……なのはに泣き付いていた…

Gの恐るべき特殊能力その八 【トラウマ】

第三話 金髪の魔導師（前書き）

セリフ多めです

第三話 金髪の魔導師

ある夜 リンク達が対G用兵器を買いに街に降りた時 何かの力を
感じた

「……………なんだ？」

「…………この力、あの娘とにているにゃ」

「……………なのは……………じゃないな 誰だ？」

力はなのはに似ているが なのはではない
リンク達は、それを感じ取った
そして、そこから導き出される答えは一つ

「もう一人の魔導師？……………」

「……………まあ 力を持つものが一人とはかぎらにゃいにゃ……………問題は
敵か 味方かにゃ」

「リンク……………ユウちゃ……………ん」

と、二人が真面目に話していると 後ろで楽しげにリンク達を呼ぶ
声が聞こえてきた

「…………………………」

「あつちで美味しそうなケーキを見つけたんですけど買って帰りま
しょうよってどうしたんですか？」

「……デルフは感じなかったのか？」

「……？……ああ さっきの魔力ですか？……別に興味ありませんし」

「………お前は相変わらずにや……無関心というかなんというか……」

「私としては折角のデートなのにリンクが他の子に気をとられてい
る事の方が問題です」

「………デートって俺もいるが？……」

「あら？私は、ユウちゃんも好きよ？可愛いもの」

「………ペット感覚かにや……いや、普通はそうか リンクがちょっ
とおかしいのか………」

「そうですねえ おかしいというか凄いと言うか………あら？そう
いえば、リンクは？………」

「はい、デルフ さっき言ってたケーキ 適当に選んで貰った」

「………きゃあああ？買ってきてくれたんですか？ありがとござ
います？お礼にあなた達が気になってる魔導師に話を聞いてきてあ
げます」

「「………え！？」」

「じゃっ？」

「おっおいデルフ！！」

慌ててリンクが引き止めようとしたが、デルフはその場から一瞬で消えてしまった

「「…不安だ（にゃ）…」」

リンク達がいたすぐ近くのビルの屋上に二つの人影があつた

「…………ここに母さんの探している物があるんだ…………」

「だけど、どうやって探すんだい？」

「ロストログアだから近くにあつたら分かると思う…………ね？バルデ
イッシュ」

《はい》

「…………じゃあ まずは寢床を確保しないといけないね 空き部
屋に結界でもかけるかい？」

「うん お願いアルフ」

「…あらあら、人の部屋を勝手に借りるなんて関心しませんねえ…
…てっ人の事言えないか」

「！…………誰だ！？」

デルフが、現れた

（……いつの間に!?!?!?! 全然気がつかなかった）

「あんた なに者だい!」

「……通りすがりの者です ちよつと聞きたい事があつてきました」

「……………なに?」

「あなたの探し物っていうのは何ですか?」

「!?!? アンタには関係ないよ!」

「私の、旦那（!?!?!）が あるものを探してまして もしかしたら
同じものかもしれませんよ?」

「……………ある物?」

「ええ ジュエルシードっていう石なんですけど……」

「……………!?!?!」

デルフの言葉に 二人は驚きの表情を見せた

（ジュエルシードって 確か、フェイトが探すように頼まれたロス
トロギア……………なんでこいつが……………）

「ふむ、一緒みたいですな ……手伝つてあげましょうか? ジュエ
ルシード集め」

「……え?」

「……な!?!?!」

「私達にとっては邪魔以外の何物でもないんですよ 誰でも良いからさっさと回収して欲しいんです」

「それを 信じろって言うのかい？」

「ええそうです そうすれば私達の住処にあるジュエルシードをあげます」

「持つてるの!？」

「はい?一応はうちのダーリン(!!?)が封印に成功したのがあります」

「…てことは アンタも魔導師か？」

「少し違いますけど 説明が面倒なんで そういつことにしといてください」

「……は、はあ」

「という訳で 今から私の愛の巢に案内してあげましょう?」

「「「」」」

(どうする?フェイト 何かコイツ調子が狂うよ 気味が悪い)

(……………あつ愛の巢ノノノ)

(……………フェイト?)

(ひゃあ!なっ何?)

(……いや、どうするんだい？ コイツの言つことを信じるのかい？)

(……嘘を言っている風には見えないけど……でも……)

と、二人が目で(?)会話をしていると、

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……やっやっ登れた……」

主人公が現れた

(……またなんか妙なのが来た!! 何なんだいこの世界は!)

アルフは軽い憂鬱間を覚えた

(……何だろう この人 不思議な感じがする……)

フェイトは、リンクから何かを感じ取った

「それよりも どうやって登って来たの(んだい)?」

「……闇夜に隠れて??」

「いや、そう言う事じゃなくて!」

「……所で、あなたたちは誰だ?」

「……遅い」

リンクの登場にアルフだけじゃなくフェイトまで少し憂鬱間覚えた

これがリンク達と、フェイト達の初めての出逢いだっただけで、それ以上は……

第三話 金髪の魔導師（後書き）

.....感想待ってます

第四話 持ってけジュエルシード

「という訳で ここがおれ達の住みかだ」

場所は とある山奥

リンク達の住みか

あの後 お互いに自己紹介したのち ジュエルシードを渡すために
フェイト達を説得

で 何とか少し…ほんの少しだけ信用してもらい現在に至る

「…いや 住みかって…あんた達こんなところにすんでんのかい？」

アルフが信じられないといったように呟く

「…？ 何か問題でも？ 見た目はこんなでも中は住みやすくして
るよ…まあ…奴が出ない限りは…ね…」

そついうとリンク達は遠い目をしだした

数日前の壮絶なバトル（？）を思いだしているのだろう

（フェイト こいつらを信用して大丈夫なのかい？）

（…悪い人達じゃないと思う）

（……フェイトがそついうなら…）

フェイト自信 なぜだか分からないがそつ思った

「っと いかんいかん 軽くトリップしていた」

不意に正気に戻ったリンクはそついうと 住みかの中に入った

「ちょっと待ってくださいねえ　今　持って来ますから」

「…何があったかはこの際聞かないけど　ジュエルシードはどうやって手に入れたんだい？」

「拾った」

「は？」

「ですから　拾ったんですよその辺で　でっリンクは日夜封印に勤しんでたって訳です　まあ　完全には無理でしたけど…それはまた別のお話です」

そういうとデルフは　強引に会話を打ち切った

「……どうしてこんなところに住んでるの？」

今度は　フェイトがデルフに質問した

「…話せば長くなりますから　また今度ね」

デルフは曖昧に笑いながらそういった

何だか　これ以上は聞けない様子だったのでフェイトも黙った

「そういうお前らは何者にや　にゃんのためにジュエルシードを集める？」

「……あんた達には　関係ないよ」

ユウの質問に アルフは素っ気なく答える

「…にゃんにゃ 言えにゃいほどヤバイことにゃのか？」

「はあ？ あんた達を信用してないだけだよ」

「にやるほど 簡単に人を信用できにゃいほどヤバイ道を歩いてきたって訳か」

「なっ！？」

「（図星か）… お前達… 特にその娘からは見た目からはわからんほどの戦いの匂いがするにゃ…（リンクと同じにゃ）」

その娘… フェイトは多くの戦いを経験してきた ユウはそのことを見抜いていたいや 見抜いていたのはユウだけでなく リンクもデルフも気付いていた事だった

もちろん フェイト達はそんな話も素振りも一切していないつまり たった数十分でリンク達は見抜いた事になる

（……なんなんだい こいつは…）

ユウの言葉にアルフは驚愕する

「まあ 興味はにゃいが もし俺たちの敵ににやるようにゃ事にゃれば容赦にゃく潰す」

ユウは静かに しかしはつきりとそういった… 殺気付きで… その殺気にフェイト達の背中からは嫌な汗が流れた

（あちゃー ユウちゃんの悪いくせができましたねえ… ちょっとヤバいですねえ この空気）

ユウは基本的にリンクやデルフ以外には心を開かない…なにかしらの敵意を向けてくる相手には特に…

「まっまあまあ とりあえずはフェイトちゃん達も私達の事を信用してくれたわけだし 仲良くしましょう」

「こいつは 信用してにやいといったぞ 大体信用してにやいのによくここまでついてきたにや？」

それはデルフも気にはなっていた…が…多分リンクに調子を狂わされたせいだろうとデルフは思っていた

「まあ それはリンクのせいでしょ」

なので リnkのせいにした

「……………にやるほど」

ユウも何故か納得した

「って 勝手に納得してんじゃないよ…ただあのリンクとかいう奴に調子を狂わされただけさ！」

「アルフ それじゃリンクのせいって言っているようなものだよ」

（（やっぱりか！））

アルフの言葉にユウとデルフは心の中ではもった

「あつたばかりの人を陥落させるとは リンク…恐ろしい子…!」

デルフは 驚愕しながらそういった

「ごめん 待たせたな」

つと その時リンクが戻ってきた

「はい これの中にジュエルシードが入ってる」

そういつてフェイトに 箱を手渡す

「……ホントにいいの？」

「ああ 俺には必要ないからな 持ってけ」

リンクは 笑顔でそういった

「ありがとう」

フェイトはそういつて箱を開け 封印に取り掛かった

「バルディッシュ」

《了解》

フェイトは バルディッシュと呼ばれる斧の様なものをジュエルシードにかざした

「ジュエルシード…封印」

そして ジュエルシードはバルディッシュの中に吸い込まれていった

（やはり 高町なのはと一緒か……でも 仲間ではないようだけど）

一瞬なのはのことを教えようかと思ったが魔導師に異様な警戒を見せていたためやめた

後にこの事で 少しだけややこしくなるとも知らずに……

番外編 リンク紹介（前書き）

とりあえずは主人公の紹介です

番外編 リンク紹介

〈リンク〉

年齢：9歳

利き腕：左

属性：不明

術式：陰陽術

家族：なし

性格：お人好しで仲間思いだが仲間を傷付ける敵には容赦しない…
が 例え敵でもなにかしらの事情があれば見逃す…というか首を突
つ込むこともある

例え仲間であろうと間違っていると思えば全力で止めようとする…
これはユウやデルフも一緒にあり3人曰く（仲間は協力し支え合う
ものであり甘やかすものではない）とのこと…鈍感

容姿：主人公の類にもれず整った顔立ちをしている

金髪（トンガリ帽子はかぶってない）

オカリナを弾く勇者と顔も名前も一緒のような気がするが多分気の
せい

普段は天然気味でとぼけた感じの三枚目だが スイッチが入ると別
人のようになり雰囲気も変わる

能力：高い霊力を持ちそれを操れる程の身体能力と経験を持つ

剣術、体術にも優れており接近戦が得意…馬術も得意洞察力もずば
抜けて高く相手の表情から感情や心境を読むこともできる（但し
万能ではない）

技量、技能ともに高い

天然たらし

女装が似合う

絶対音感（教えられたメロディーを違う楽器で演奏できる）

風の動きがよめる

望む望まないに関わらずなにかしらの力を呼び込む体質（良い事ばかりではない）動物に好かれる

と かなりのチートぶりではあるがこの全ての設定が生かされる事は多分ない（笑）

物語が進むにつれて新たな力に目覚めるかも

大体は 多作品のパロディになると思いますが： 申し訳ない技とかを考えるのが難しい何かありませんかねえ：

番外編 リンク紹介（後書き）

なんか書きたくなつた 申し訳ない

第五話 協力（前書き）

今回も 話が進みません すいません

第五話 協力

「フェイト ジュエルシードも手に入っ たし早く行こう」

「うん」

「ええ！もう帰っちゃうの？泊まっていきんしゃーい 中はなかなか快適だよ たまにGがでるけど…」

「泊まるか！大体 Gってなんだい？」

「…G…それはこの世界を裏で支配する 影の支配者」

「か…影の支配者？そんな奴がこの世界にいるなんて聞いてないよ」

「どうやらフェイト達はGの存在を知らないようだ……うらやましい」

「……」

「フェイト やっぱ早く行こう なんかヤバそうだよ」

「えっでも…」

「リンク やめとけにや Gを知らにやいにやんてどうせいいとこ育ちの奴らにや」

「……あたし達がいいとこ育ちだって!？」

「違っのかにや？」

「当たり前だ！私達は いやフェイトはこれまでずっと苦しんできたんだ それを……!」

途中まで言って アルフは我に返った

「……いや なんでもないよ」

「アルフ 私は苦しんでないよ 好きでやっている事だから」

「……お母さんのためですか？」

「「!？」」

デルフの問いに二人は驚いた

フェイト達の会話をデルフは聞いていた
そして デルフはずっと気になっていた

「……話してくれませんか？もしかしたら 協力できるかも ねっ
ユウちゃん」

デルフはユウに何か含みのある言い方をし笑顔を向けた

「どうやら デルフもユウも考えていた事は一緒みたいだな」

リンクはそういつてフェイト達を見た
そして…

「話してくれないか？ジュエルシードを集める訳を」

「あんた達には関係ないって言ってるだろう？大体私達に協力して
何の得があるっていうんだい」

「ふつ 人生を楽しむコツは損得を考えない事なのさ」

アルフの問いにリンクは前髪をクールに書き分けながら答えた

「まあ 要するにバカなんですよ リンクは」

「…………… って 俺はバカじゃない!!」

「いや バカにゃ」

「バカですね」

「………… バカじゃない! なあ 二人もそう思うだろ」

リンクはフェイト達に助けを求めた…が…

「バカだね あんた」

「えっえつと その…」

アルフははつきり答え フェイトは返答に困り目を逸らした

「なん…だと」

それがトドメとなり リンクはうなだれた o r z

「本当に おかしな奴だね」

「フフ ダメだよアルフ 失礼だよ」

「!!! フェイト 今笑ったかい!?!」

「え?……そういうアルフこそ」

二人は自分達が笑っていることに気付き驚いた
ここ最近 自然と笑ったことなどなかったからだ

「……アルフ 私 この人達に話してみる」

「大丈夫……なのかい?」

「うん きつと大丈夫」

そして フェイトは話したジュエルシードを集める訳を……

第五話 協力（後書き）

次回は 巨大化した萌え動物がでます

感想待ってます

話間 大きなニャンコ（前書き）

番外編みたいな感じです

話間 大きなニャンコ

くリンクサイドく

初めまして この物語の主人公……かどうかわからないリンクです
さて 今俺は人の家に（無断で）入っています

「にしても でかい家だなあ」

そうこの家 恐ろしくでかいし広い そして猫が多い（重要）
さて なぜ俺がここにいいのかというと……

「ミャアー？」

ジュエルシードの気配がしたのでお邪魔させてもらいました
しかし これは予想外

「……猫だよな」

「……猫だにゃ」

「……」

目の前には 大きな子猫（？）がいます

「大きな子猫（？）なんて 初めて見たよ」

「言ってる場合にゃ！早く何とかしないとまずいにゃ」

「ああ そうだな このままだと巨大なNが大量に……」

「ちょっと待つにゃ Nとは何にゃ」

「NO MIの事」

ペットを飼っている人は一度は被害にあう小さき吸血鬼 厄介極まりないGに並ぶ害虫

「にやるほど NO MIだからNかにゃ」

「おう」

「……じゃあ 待てよ 猫が巨大化しているということはNも……」

「………多分」

うわぁ 行きたくねえ

し、しかし早くしなければ色々マズい

「よし ユウ 行け！」

「つて 俺かにゃ!？」

「同じ猫だろ？」

「だから こんな時だけ猫扱いするにゃ！」

おのれ 我儘を！

「大丈夫さ　ちょっと話を聞いてきてくれるだけでいいから」

「お前しか　大丈夫じゃにやいにやー！」

ばれたか…

「ミヤー？」

ヤベ　みつかった！

「ユウ　話している暇はない何とか　説得しないと」

「ちっ　しょうがにやいにや」

そういうと　ユウは子猫（？）の元に走ってなにやら話しはじめた

「にやー　にゃん　にゃにや」

「ミヤー？ミヤン　ミヤー」

やべえ　超可愛い

萌える！！

あっ戻ってきた

「なんだって？」

「原因はジュエルシードで間違いにやいにや　ただ厄介なのは　あの子猫　かなり嬉しがってるにや」

「嬉しがってる？」

「おっきくにやっちゃったー？…だそうにや」

ぶっ！

ユウの言葉に 勢い良く鼻血が出たが なんとか手で押さえた

「くっ あれはヤバい 早くなんとかしないと…多くの人が萌死んでしまう」

「いや お前の頭が 一番やばいにゃ」

何を言う！ 全世界の猫好きの方々は間違いなく萌死ぬぞ

「とにかく 早くあの子猫を助けなくては そして おもいきもふもふしなくては……」

「…（最後の言葉は無視して）そうだにゃ とりあえずは俺がにゃんとか説得してやるにゃ その後はお前に任せるにゃ」

そういつてまたユウは子猫（？）の元に走って行った

「さて 暇な俺は結界でもはるか………！………なんだ？」
誰かが結界を張った？

しかも この辺りに……

この力を感じたことがない

「まさか 新たな魔導師か？」

まだいるのか？ そう思った俺は 結界の中心地点へと気配を殺しながら向かった

話間 大きなニャンコ（後書き）

次回でなのはとフェイトが出会います

第六話 なあにこれ（前書き）

ツッコミはなしの方向で

第六話 なあにこれ

前回までのあらすじ

主人公不法侵入

大きな子猫(?)を発見

ユウが説得

暇な主人公

そこに謎の結界、魔力反応主人公 スネーク化

とまあ こんな感じ

さて、絶賛スネってる主人公ではあるが 結界の中心地点にきてビツクリ…ではなく 軽くホツとしていた なぜなら 中心地点には 啞然としている栗色の髪の子とフェレットがいたからだ…
なのはとユーノである

「…ふむ、まさかとは思っていたが、あの二人か」

新しい魔導師だったらどうしよう…と考えていた反面少し ワクワクしていたリンクは若干残念そうにぼやいた
それから、どうしよう…と悩んでいた

話し掛ける…にしても…今は絶賛不法侵入中…下手すればゴヨウさん
れ相手フィールド場に守備表示で特殊召喚してしまう

「……よし、逃げよう」

ということ、なのはに任せてここは退散することにした
…結論早すぎである

…が、世の悪業をそのままにする程甘くはない

「リンクー！こんにやとこにいたのか 搜したにや！」

つと、タイミングが悪い事にユウがかなり大きな声で怒鳴ってきた

「わあー！！ユウー！！静かにしてくれー！！！」

驚きと焦りのあまり一番声がでかいというお約束をかましてしまったリンク
当然……

「誰かいるの！？」

つと、なのはたちに見つかってしまう

「……………ユウの所為で見つかってしまったじゃないか」

「いや、お前の所為にや」

このやり取りもお約束である

リンクはしぶしぶ茂みの中から出ていった

「……………えーっと 久しぶりだね 高町さん？」

「りっリンクくん！？…それにユウくんも！……………何やってるの？」

「……………ジュエルシードの力を感じて来たんだ」

「えっでも、ここすずかちゃんのお家……………」

「さあ！さつさとジュエルシードを回収しよう！……いくぞ高町なのは……ユーノ・スクライア……」

なのはの言葉を強引に打ち切り、リンクは早足に子猫（？）の元に歩いていった

「「あっはい……」

リンクの言葉に思わず返事をし、なのは達もリンクの後に続いた

「「……………ごまかしたにゃ」

そんなリンク達を見ながらユウはため息をつきながら呆れていた

という訳で、やっと本題に移れる訳だが

「……………本当にあの子猫（？）は大丈夫なんだな？」

「うん 封印するのはジュエルシードだけだから 子猫（？）には害はないはずだよ」

「ふむ、ならばよし！子猫（？）には可哀想だが……………元に戻ってもらおう」

「……………後でなくさめてやるかにゃ」

「じゃあ いくよ！レイジングハート！」

つと、なのはが封印しようとしたその時

「ふにゃー！！！」

なにかしらの危険を察知した子猫（？）が、いきなり突っ込んできた

「のわああ！！突っ込んできたあ！！なのは！急いで封印を！」

「ダメにゃー！！間に合わない！！！」

「ちいっ！！！」

封印が間に合わない事を悟ったリンクは 庇うようになのはたちの前にでた

「リンク君！？」

「リンク！？」

「リンク！！っち 仕方にゃい！！！」

ユウが リンクを守るため子猫（？）に攻撃しようとした その時だった 何処からともなく飛んできた雷が子猫（？）に直撃し子猫（？）は勢い良く倒れた

そして、一人の少女が木の枝に勢い良く着地（木？）した

「…大丈夫！？リンク！ユウ！」

「……………フェイト？」

どうやら 先ほどの雷は フェイトのものらしい

「……フェイト」

リンクは フェイトの名を呼びながら フェイトのいる木に飛び移り……そして

「こら！ニャンコをいじめるな！」

そういつてフェイトにデコピンした

「あう！？」

まさかの攻撃に デコを抑えて涙目になるフェイト、ついでに 頭には？マークが飛び交っている

まあ 助けたのに怒られたら誰だってそうなるだろうそんなリンクに……

「このばか！！」

一匹の狼が怒鳴りながらタツクルしてきた

「いふ！？」

もろに食らったリンクはぶっ飛び別の木に激突、そのまま地面にダイブした

「まったく フェイトはあんたを助けたってのに 何考えてんだい
！！」

狼はプンブン怒りながら リンクを睨んだ

「…アルフ やりすぎたよ」

「何をいつてるんだよフェイト まだ 足りないぐらいさ」

「………… フェイト………… アルフ………… な…何でここに？」

「ジュエルシードの反応があつたからに決まってるんだろ それより あいつらはどういうことだい？」

そうつって アルフは、なのはを見た

「あいつら 魔導師だろ？一緒にいるってことは 仲間か？」

「まあ 初対面ではないな」

「ふーん」

アルフはかなり 疑った目でリンクを睨んだ

「………… もしかしくなくても、俺の事疑ってる？」

「当然！」

アルフ即答

フェイトもどういふ事だと言った感じてリンクを見ている
正直かなり怖い 特にフェイトが……

「ああ まあ なんていうか そのお……………」

「リンクくん？その子は誰なの？」

リンクが どう説明するか悩んでいたとき、なのはがそう聞いてきた

「と、とにかくジュエルシードが先だ！」

何か下手なことを言えばヤバそうだったので早急に逃げる事にした
リンク……ヘタレである

だが、そうは問屋がおりさない
どちらがジュエルシードを封印するかという問題に直面してしまう
……ついでにごまかしはできない……さらにはフェイト達のはなに
敵意を向け、話を聞く気はない
そうなれば、当然激突は免れない

「ヤバイよ……ユウ……どうしよう」

「こんにやことにやら あの時 あの娘のことを話しておけばよか
ったにや」

「……くそ」

「ところで お前はどっちの味方にや？」

ピクッ

ユウの何気ない一言になのはとフェイトが反応したが恐怖のあまり
距離をとっていたリンク達は気付いていない

「いや、味方も何もフェイト達とは約束してるしなあ……でも 目
的は一緒なんだし 高町さんたちにも協力を頼んで……」

そういった所でリンクはギョツとした なぜなら ものすごい黒い
オーラを纏ったのはが こちらを睨んでいたからだ

「……た、高町さん？一体なぜ　そのようなどす黒いオーラを纏っているのでしょうか？」

「ふむ　リンクも罪な奴にや」

一体いつのまになのはとのフラグがたつたのか（おそらくはG事件後）リンクにかつてないピンチが訪れようとしていた

………ジュエルシードは？

第六話 なあにこれ（後書き）

次回 カオス

第七話 何か色々カオス（前書き）

ツッコミはなしの方向で、

第七話 何か色々カオス

くリンクサイドく

……どうしてこうなった

いや マジでそう言いたい ありのまま今起こっていることを話すと 高町さんとフェイトが戦ってます
ジュエルシードをめぐって……

「……ジュエルシードは渡さない！」

「くっ！！」

……フェイト強いな 高町さんを完全におしてるよ

あの後、高町さんの隙についてフェイトが奇襲
高町さんも何とか応戦

ということになった訳で……

こちらとしては 助かったのだろうが 後で色々と問い詰められそうだ

「……いいのにかにや 手助けしないで」

……ユウ 簡単に言うなよ

「リンク！なのはを助けてあげないと！」

……ユーノまで

「いや、俺は何もしない」

……できないし……

「なっ!？」

「ん？」

俺の言葉に ユーノが驚き ユウが首を傾げる

「勝ったほうがジュエルシードを封印する だから ユーノ 邪魔するなよ」

それが 一番手っ取り早い フェイトには 目的もあるしな…

まあ 命の危険がきたら止めるが……

それに 今のフェイトは高町さんの話を聞いたりなどしないだろう
何か 魔導師をかなり警戒してるし

「さて 俺は今のうちに子猫(?)からジュエルシードを引き離す
か」

「できるのかにゃ？」

「がんばる」

ジュエルシードの封印はかなり危なかったが出来た 後は、こんな
自体でもジュエルシードを封印できれば言うことはない

「ユーノは 高町さんを見てろよ 多分負けるから」

「なっ!？」

俺の言葉にユーノはまた驚き　そして俺を睨んできた……ふむ、嫌われてしまったようだ

それにしても、驚くことかね　高町さんとフェイトでは実力の差は明白だ　それもわからんとは……やはり一度敗北を味わった方がいいな　高町さんもユーノも…

「ずいぶん冷たい態度にや　どうしたにや？」

「ただ協力してるだけじゃダメだと思ってね」

いろんな意味でね……

つと、話しているうちに二人の戦いも決着がつきそうだ　お互いに対峙してる

「むっ！」

ヤベ　子猫（？）が目を覚ました
つて　おい　相手から目を離すなよ

子猫（？）が起きた事で一瞬フェイトから目を離れた高町さん　その隙をフェイトが見逃すはずもなく

バチバチ…ドォーン

フェイトの持つバルディッシュ…だっけ？　から雷が飛び高町さんに直撃した

「なのはー！」

ぶっ飛んだなのはユーノが追いかけて魔力のクッション(?)を作り受け止める……大丈夫そうだなそれにしても 便利だな魔法って

「うにゃー」

目が覚めた子猫は 何が何やらわからないと言った具合に辺りをキョロキョロしている……可愛い

「遅かったにゃ」

「ああ そうだな」

気を失っている隙に封印したかったが無理だったか 目が覚めた以上 俺の力じゃ封印できない

「所で 一つ気にやることがあるんだが……」

「ん？」

「あの子猫(?)の首筋の黒い物体はにゃんにゃ？」

……黒い物体?……はて 確かに あれは一体……

「……なあ ユウ 何か嫌な予感がするんだが」

「……俺もにゃ」

お互い黒い物体に対していい思い出がない俺たちは互いに顔を見合わせた

「うにゃー!」

カリカリカリカリ

つと その時 いきなり子猫(?)が鳴いたかと思うと 首筋を掻き出した

……そして 蹴り飛ばされる黒い物体

子猫(?)の近くに落下する黒い物体

子猫(?)の近くにいる俺達
ご対面?

巨大化した猫 首筋の黒い物体 掻き毟る

つまり…… ペットを飼っている人にはうざさ120%のアイツ

N O M I

今、巨大吸血虫との人類の命運をかけた戦いが始まろうとしていた
(笑)

第七話 何か色々カオス（後書き）

……次回からカオスです ツツコミは……

第八話 虫なんて大嫌いだ 前編（前書き）

戦闘って難しい

第八話 虫なんて大嫌いだ 前編

くリンクサイドく

俺は今どうするべきか迷っていた ていうかどうすりゃいいんだよ
この状況

とりあえず ユーノに聞きたい事があるけど 離れてるし
……ていうか 微動だにしないんだがあの子の虫野郎

「……………どうするにや あいつ動かにやいぞ」

「どうするって言われても ……」

正直 戦いたくない ていうか怖い

「……………こんなにやことにやら あの娘を助けておけば良かったにや」

「……………そういえば フェイトはどうした？」

周りを見渡してもフェイトとアルフの姿はない

「……………バルディッシュ モード電撃」

《了解》

…と思つたら…… フェイトさんいきなりですか

フェイトは 虫野郎に向かって電撃を放つが……………

「っ！？ 速い！」

虫野郎は凄まじい跳躍力でそれを躲す

そのあとは 予想通りというかなんというか ピョンピョンとその場を飛び回りフェイトのさらなる追撃を躲しまくっていた

「なんなんだい！？あいつの速さは、化け物か！」

アルフもかなり驚愕している

「……………当たらなければどうという事はないって奴か…」

「言ってる場合か！！ 早くにゃんとかしにゃいとヤバいぞ！」

「ああ 動き出した以上は倒すしかない！」

俺は懷から一枚の札を出し それに靈力を込める

「我が力を受けし物よ 敵を切り裂く刃となれ 現れる！コモクの剣」

そして 靈唱を唱えると札は青白い炎に包まれ一本の剣が出現した
小さな剣で 刃の部分以外は木で出来ているためかなり軽く子供の俺でも問題なく扱える

「よし いくぞ ユウ！」

「おう！」

「！！ フェイト あいつらも戦う気だよ」

「え!？」

アルフの言葉にフェイトはかなり驚いている

こら!何だその反応は おれ達が戦うのがそんなに以外か!?

「リンク!オレが奴を牽制する 隙を見つけてぶった切れにや!」

「いや 俺が奴の注意を引き付けるから ユウが攻撃しろ!」

「何を言ってるにや!お前の剣は飾りにや!お前が斬れ!」

「ユウこそ その爪や牙は飾りか! お前がやれ!」

「にゃんのために剣を出したんにや!おもいつきり やってこいにや!」

「これはもしものときのためだ! ユウこそ 最近妖力使ってないから訛ってるだろ!」

「いや 別に」

「いやいや たまには力を使った方がいいって」

「お前 そんなにやこといつてあの虫野郎にびびってるだけだろ?」

「なな何をいってるんだかわからないな
それは ユウなんじゃないのか?」

「にゃ!?!ままさか あんにゃ奴にビビる訳にゃいにゃ」

……正直に言うとかかなり怖い 何だよ 巨大なノミってどう戦えっ
ていうんだよ！

「……………何をやってんだい あいつらは ……はあ少しは 戦
えるかと思ったけど全然使えないねえ」

「……………リンク達は戦わなくても 私一人で大丈夫だよ」

……………い、いかん 何か アルフが残念なものを見る目でこっち
を見てる

フェイトの方は 何かホツとしてるようになってフェイトさん バル
ディッシュから光の刃を出しちゃって

まさか 接近戦を仕掛けるつもりじゃ……………

「はああああ！！！」

ぎゃあああ！そのまさかでしたー！

鎌のような形をしたバルディッシュを構え フェイトは凄まじい速
さで虫野郎に斬り掛かった

「っ！？」

だが 虫野郎はそれを躲し ピョンピョンと そこら中を飛び回る

……くそ！動きが読めない

「くっ！ダメだよフェイト 動きを止められない！」

「くっ！」

更に 追撃を仕掛けるも当たらない

……仕方がない

「……ユウ こうなったら腹を括るしかないようだぞ」

「……やるしかにゃいか…」

「アルフ！」

「！？ なっなんだい！？」

「おれ達が敵の動きを止めるから ジュエルシードを封印しろ！」

「なっなにいつてんだい あんた達に止められるわけ……！！」

おれ達はアルフの返事を待たずに虫野郎に突っ込んでいった

「フェイト！」

「リンク！？ユウ！？」

「加勢する！」

そういつて俺は思い切り地面を蹴り 虫野郎との距離を一気に詰め
剣を横風ぎに払った………だが やはり 奴には避けられてしまう

「ふん！甘いにゃ！」

しかし 虫野郎の着地点に向かって ユウが口から妖力の塊を放つ
いや この場合吐くと言った方がいいのか？

「くだらんことを 考えてにゃいで 集中しろにゃ」

人の心を読むなつと言いたところだが、確かに集中した方がよさ
そうだ

ユウの妖力は 確かに命中した
だが……

「……………無傷……か」

第八話 虫なんて大嫌いだ 前編（後書き）

いつになったら終わるのかそれは 作者も分からない

第九話 虫なんて大嫌いだ 後編（前書き）

ノミとの戦いは、終わりです

第九話 虫なんて大嫌いだ 後編

くリンクサイドく

「……………無傷か……………」

ユウの攻撃は確かに敵に命中した。しかし、あの虫野郎には傷一つついていない。ユウの攻撃が弱かったわけじゃない。それは、ユウと何度も戦ったことがある俺がよく知っているとなれば……………

「……………あの速さで、あの耐久力が、手強いな」

本気でやらないとまずいかもな……………

くリンクサイドアウトく

くユウサイドく

無傷とはにや、少し驚いたでもまあ、リンクも真面目にやる気になやっ。たし大丈夫かにや

さて、虫野郎。今度は本気でいく。覚悟しろにや！！

くユウサイドアウトく

「……………リンク？ユウ？」

フェイトは二人の雰囲気急にかわったことに少し戸惑っていた。今の二人は真剣な表情をしており、とてもさつき迄と同じ人物とは

思えない

普段、ふざけている（ように見える）分なおさら意外だった

「フェイト！」

「！ なっなに？」

「さっきの雷撃で 敵を牽制出来るか？」

「え？ う、うんって牽制！？」

「ああ 当てる必要はない とりあえず 相手の注意を引き付けて欲しい」

「一体 何をする気なんだい？」

「別に ただ 隙を見つけてぶったKILLただけだ」

「KILLって かなり速いよ？」

「そうさ フェイトでさえ追いきれなかった敵を倒せるのかい？」

「倒す！」

リンクのその即答ぶりにフェイトとアルフは驚き困惑した

（やっぱり 普段のリンクと違う）

（一体なんなんだい 普段は全然違うじゃないか）

「……どうかした？」

「う、うつん 何でもないよ……バルディッシュ！」

《了解 モード雷撃》

「ふ、ふん お手並み拝見といこうじゃないか」

「よし、んじゃ 牽制よろしく」

「ちょ！どこに行くんだい！？」

「ちよいと 準備にね すぐ戻る それまで適当に暴れてて」

そついうと リンクは林の中へと消えていった

「なっなんだい あいつは！！」

「ま、何か考えがあるんだろ お前達は、お前達の仕事をしろにや」

そついうと ユウは木の枝を飛び移りながら、敵との距離を詰めようとした……がユウが近付くと虫野郎は敵と認識したのか すぐさま距離を離れた

「ふむ、だったら これにや！！」

ユウは先ほどの妖力の塊を虫野郎に放った
しかし やはり虫野郎はこれ避けた

〔虫の言葉〕

〔ふうん こわっぱ風情が我をとらえられるものか！！〕

だが…今回の攻撃は一味違った 虫野郎が跳んだところ目がけて無数の雷撃が放たれたのだ

「今度は逃がさない！」

「俺の攻撃は囷にや 覚悟しろにや 虫野郎！」

いくら速いといっても空中では無防備 加えてこの数の攻撃 誰もが直撃する事を確信した しかし……

「甘いわ……こわっぱ共……！」

なんと、虫ではあり得ないぐらいに 巧みに体をひねり、無数の雷撃を全て避けてしまった

「んにゃ！？あいつ ホントに虫かにゃ！？」

「く！もう一度」

フェイトは 再度虫野郎に向かって攻撃しようとするが……

「さてえ 今度はこちらの番だな」

着地と同時にいきなり虫野郎がユウに向かって突っ込んできた

「……！？」

不意をつかれたユウだったが何とかこれを躲す

「むううん……！」

しかし 空中で一回転して 木を足場がわりにし そして また
第二の突撃を仕掛けてきた

「お前本当に虫かにや!？」

「虫ではない! 神だ! ! !」

自称神である虫^{ムシ}野郎のタツクルを食らいそうになったその時 いき
なりユウの周りに蒼白い光の壁が出てきて自称神の虫を弾き飛ばした

「ぶるあああ! ! !」

自称神の虫はそのまま木に叩きつけられる そして 今度は 蒼白
い札が無数に出現したかと思うとそこから黒い鎖が飛び出し自称神
の虫に絡まり完全に動きを封じた

「ふう かかったか」

「リンク!？」

「これあんたがやったのかい!？」

「ああ 名付けて『呪縛陣』 無数の『呪縛符』を周りに設置して
敵を一斉に捕える 術式に時間が掛かるから本来は罠として使うん
だがな」

「じゅばくふ?」

「なっなんだいそれ?」

「あの鎖が出てる札の事だ 単体でも使える」

リンクはそういうと空气中に『縛』という文字を書いた すると文字の周りを蒼白い光が囲みまるで一枚の札のようになった

「これを操って相手につけるても動きを封じれるんだが あんな風に鎖を出すことも出来る」

「何だか変わった力だね 魔法とは違うみたいだし」

「確かに バインドに似てるけど違うみたいだね」

「まあ 魔法じゃなくて霊術だからね ってそんなことより速く封印しないと」

「あっうん そうだね」

フェイトはそういうと自称神の虫野郎の所に行った

「ふっこの勝負我的負けだが 貴様等の驚きあわてる顔が見られて満足だ」

「封印」

くリンクサイドく

その後、虫野郎と子猫に取り憑いていたジュエルシードを封印した

その後、高町なのはの容体が気になったがユーノが友達を呼んできたのでひとまず安心して 急いでその場を離れた 不法侵入 ていうか人ん家だつてこと忘れてた

とにかく ジュエルシードも手に入れたし めでたしめでたしかなう関係なのかな かな？」

「フェ、フェイトさん 目が怖いよ？」

「そういえば、フェイトがあんたの事を助けてやったのに あんたフェイトに何をしたっけねえ？」

「ア、アルフさん そんな指をならさなくても……って フェイトもバルディッシュを構えるのをやめて！」

「……説明してくれるかな かな？」

「さ……って 説明してもらおうかい？」

「一夜を共にしたなかにゃ なっリンク」

「……確かに泊めてもらっただけどさあ」

「一緒に寝たる？」

「いや あれは怖い話をユウがするから……って フェイトさん？なぜ バルディッシュを鎌状に？………ちょっと待って！ストッパー！！死ぬから！！それ 命を刈り取る形だから！！！！ユウ！ヘルプ！ヘルプスミー！！！！」

「ヘルプミーにゃ」

「どっちでもいいから 助けて!!!!」

「さあ 楽しい 鬼ごっこの始まりにゃ」

「てめえええ 絶対面白がつてるだろお!!!! 覚えてろよこの野郎!!!!」

「リンク戦いは、まだこれからにゃ」

「やかましいわあ!!!!」

第九話 虫なんて大嫌いだ 後編（後書き）

次回は お泊りです

第十話 旅行！？

時刻は、夕方

「…………リンク その手に持っているものはにゃんにゃ」

「ノミとりスプレーだけど？」

「……………」

「……………」

シュパッ！ ガシッ！

「何処に行こうというのかね？ユウ」

「話せにゃ！貴様 俺をどうするつもりにゃ！？」

「どうもしない スプレーをかけるだけだ 全てはお前のために」

「本音は？」

「復讐 お前とノミに」

「やっぱりか！」

「当たり前だ！俺の受けた恐怖を貴様にも味あわせてやる！」

「だから 何度も謝ったにゃ！」

「許さん！」

「許せ！」

「……………貴方たちは一体何をしてるんですか？」

俺とユウがギアアギアとわめいているとき、いつの間にか、呆れた様子でデルフが立っていた

「おお デルフ 久しぶり」

「デルフ 懐かしいにゃ」

本当に久しぶりだ 最後に合ったのは何時だっけ？

……………あれ？数時間前だっけ

「……………殺意がわいたわ」

あれ？ちょっと デルフさん どうして そんなにどす黒いオーラを纏って近付いて来るんですか？

ちよっ！腕は！腕はそっちに曲がりませんよ……………

「今度 そのネタを使ったら許しませんからね？私だって 気にしてるんですから」

「出番が少ないのが？」

「腕一本じゃ足りないみたいですわね」

「「すいません」」

俺とユウは デコを床に擦り付けるぐらい 深々と頭を下げて
いうか土下座した

「相変わらず バカみたいな事をしてるね あんた達は」

「みんな 仲良しだね」

「げえ アルフ！フエイト！」

声がしたので 顔を上げて見ると、そこには さっき俺の事を散々
追い掛け回した方々が立っていた

「げえってなんだい！人を化物みたいに！」

「化物じゃにやくて 化け犬だけにや」

俺の反応に怒るアルフに 更に 追い打ちをかけるユウ

「あたしゃ 狼だよ この化け猫！」

「何だと！？」

「なにさ！」

互いに睨み合う

何か 仲悪いなこの二人

「はいはい 喧嘩はそこまで」

互いに睨み合う二人をデルフがたしなめる
ナイス デルフ

「所で何か用か？」

二人の事はデルフに任せて俺は フェイトに話し掛ける

「え？あ、うん……えっと リンクに 謝りたくて」

「謝る？ああ もしかして 昼でのこと？」

フェイトとアルフが狂戦士の魂を目醒めさせ 俺をフルボッコにした事か

「別に 謝らなくていいよ ていうか 高町ちゃんの事を話さなかった俺が悪いんだし ごめんね」

俺は そついうとフェイトに頭を下げた

「うっん 私の方こそごめんなさい」

そついうと フェイトも俺に頭を下げた

「まあ その お互い許したって事で」

「…うん」

俺が 顔を上げてそついうと フェイトも顔を上げた
「……あの子もジュエルシードを集めてるの？」

「ああ 危険な物だからな」

「……そうなんだ」

フェイトは そういつて真剣な表情になる

……まずいな

「なあ 高町ちゃんと協力するってのはどうだ？」

「えっ!？」

俺の提案にフェイトは かなり驚いた

「そんなに 驚く事か？ 案外俺たちみたいに協力してくれるかもしれないぞ？」

「…多分 言っても分かってもらえないと思う」

むう ダメか やはりデルフの様にはいらないか
一体どうやって フェイト達と仲良くなったんだか
その能力分けてほしいよ

はあ まあ お互い 命を奪う事はないと思うし 俺は俺の仕事を
するか

「そういえば デルフ お前今までどこにいたんだ？」

「ええ ちよつと お買物に」

「ふーん っておい！」

「何ですか？」

「何ですか？じゃない　なに堂々とサボり発言してんだお前は」

「いやゝ　ジュエルシードの気配はしたんですけど　リンク達もいるみたいだし　大丈夫かなって」

「大丈夫な訳あるか！俺たちがどれだけ　苦労したと……」

「それに　福引きで温泉旅行が当たったんですよ？」

「なに！？でかしたぞ　デルフ」

「……おい」

つと　いかんいかん　危うく誤魔化されるところだった

「フェイトちゃん達もいきますよね？」

「え？私達はジュエルシードを集めなくちゃいけないから……」

「じゃあ　明後日までに準備しといてくださいね？」

何が、じゃあなのかさっぱりわからん

「って　無視するんじゃないよ！」

勝手に話を進めるデルフにアルフが怒る

どうでもいいけど　デルフとアルフって一字しか変わらないね

「ふん！」

そんな事を考えていると いきなりアルフに殴られた

「あいたあ 何をする!？」

「何か ムカついただけさ」

何その理由 ていうか理由か？

「フェイトちゃん 明日 私と一緒に買い物にいきましょう」

「でも 私はジュエルシードを……」

「はいはい たまには 息抜き息抜き？」

「あきらめるにゃ 娘 こうにやったデルフは誰にも止められにゃ
いにゃ」

「うう」

フェイト かなり困ってるな

「まあ ジュエルシードの反応があれば すぐに向えばいいじゃないか なあ デルフ」

「ええ？任せてください」

デルフは連れていくき満々だし ここはフェイトに折れてもらうしかない

「私は賛成だね」

「アルフ!？」

「フェイトは ずっと頑張ってきたんだ 少しくらい休んでも罰は当たらないさ」

「……でも……」

「フェイトちゃんは 私達と行くのはイヤ？」

なおも 考え込むフェイトに ついに デルフが最終手段にでた

瞳をウルウルさせながら フェイトに迫る
つといても かなり芝居がかかっているが……

「そっそんな事ない！……でも……」

「私達のことを嫌いなんですね？」

今度は 口元を手で覆いその場で崩れるデルフ
これには 流石のフェイトも折れるしかなかった
デルフ 恐ろしい子！！

番外編 迷走（作者が）（前書き）

小説って難しい

番外編 迷走（作者が）

旅行に行くことに決まった次の日

デルフ フェイト アルフ達女性陣は、新しい服やら下着を買ったためにデパートに 野郎二人は、家で大人しく留守番……

「よし 来い！ユウ」

「おう！！」

など するはずもなく、留守番そっちのけで修行に励んでいた

「くらえ！！」

「何のお！！」

ユウは、リンクに妖力の弾を放つが リンクはそれを避ける

「今度は、こっちの番だあ」

「ふん あたらにやければどうということにはない！！」

今度は、リンクが霊弾を放つが ユウはこれを回避 そんな事を二時間以上もやっている 留守番そっちのけで……

ちなみに 今 リンク達は 神社よりも更に山奥にいる そこで半径1キロ程に結界をはりそこで実戦形式の修行をしている

「ふうゝ 少し休むか」

「そつだにや……で、これからの予定は？」

「……………特にないな」

女性陣の買物に付き合えば 間違いなく荷物持ちをさせられる
そして 必ず待たされる そう思って留守番する事にしたリンクだ
が、家にも特にする事はない
時間つぶしに模擬戦を事をしていたが ずっとというのはきつい

「しょうがない 適当にぶらつくか もしかしたら 何か依頼があるかもしれないし……」

「にやるほど そして 金をふんだくるつもりかにゃ？」

「するか!! そんな事!!」

リンクは今 妖怪限定の探偵みたいなのをしている 評判はなか
なか…なのだが最近 は 依頼が少ないので少し困っている

「よし じゃあ 行くか」

そういつて リンクとユウは 依頼探しの旅に出掛けた 地獄が待
っているとも知らずに……

〔デパート内 服屋〕

「うゝん これも可愛いですし こっちも似合いそう……うゝん」

「デルフ 私のは本当にいいから……」

「何を言ってるんですか フェイトちゃんはおしやれするべきです こゝなにも可愛いんですから 勿体ないですよ」

「でも こんな高い物……」

「大丈夫大丈夫？ 気にしないでください？ 可愛い子には可愛い服を買ってあげるのが世の理 ウフフ 何だか萌えてきた…もとい 燃えてきた」

「デルフゝ フェイトゝ 早くしておくれよゝ わたしやもう 腹へって死にそうだよゝ」

「はいはい もうちょっと 待ってくださいねえ すぐ終わりますから…… あっ！ これも 似合いそう……」

「ううゝ デルフゝ」

「…ふふ」

「とある山奥」

「……………なあ ユウ 一つ聞いていいか？」

「……………にゃんにゃ？」

「……どいっ？」

「……………」

依頼探しの旅に出たリンク達だったが……ものの数分で迷ってしまった

「いやいや おかしいって 地元で迷うなんて 有り得ないって」

「たしかににや」

リンク達がこの山の神社に住み着いてから二年はたっている その間 何度もこの山を駆け回ったが 一度も迷う事などなかった

「っと いうことわ……………まずった？」

「ああ どうやら妖怪の縄張りに入ってしまったらしいにや……………かにやり強力にや……」

妖怪は 他の妖怪や人間に住みかを荒らされないよう自分達の縄張りに常に結界を張っている

結界にも様々な種類があるが 山奥など景色があまり変わらない場所には 人を迷わす結界が主に使われる といっても 悪戯目的や人間を逃げられなくするために使われるが……

「この辺りに 妖怪の住みかあったか？」

「にゃい まっ妖怪は基本 自由人だからにや」

「……それにしても 全くわからなかったな」

「確かに」

リンク達ならば 並の結界などすぐに察知できる
察知できなかったということは それだけ強力だという事

「……………強いかな？」

「強いにや 下手をしたら俺たちより強いかも……………」
「助けて〜！デルえも〜ん！！」

〔デパート マク ナルド〕

ピクッ

「ハッ（ ; ）！！リン太君が呼んでいる」

「リン太？誰だい？それ」

「呼んでいるって 何も聞こえなかったけど……………」

「……………じゃあ 気のせいですね（ていうか 何でリン太君何て訳の分からないことを言っただんでしょう？私）」

〔とある山奥 結界内〕

（ふふ 焦っておりますねえさあて お次は何をしましょう ウフ
フ 見事 生き残って 私を見付けてくださいね 旦那様」

リンク達から離れた所で この結界をはった張本人と思わしき人物
が 謎の鏡に映るリンク達を恍惚とした表情で見つめていた

ゾクウツ

「どうしたにや リンク」

「いついや 何か鳥肌が……」

今 リンク達の見に危険が迫っていることにリンク達は まだ 気
付いていない………

番外編 迷走（作者が）（後書き）

ご感想 ご指摘 ご不満

どんどん書いてください 励みになります

それから ご感想を書いてくださった方 本当にありがとうございます
ます

番外編二 暴走（前書き）

新しいオリキャラを登場させてしまった 申し訳ないです

番外編二 暴走

二年前

私は 今 全身傷だらけの状態で追っ手から逃げていた 奴等は> 払い屋<

陰陽師の末裔で 妖怪を刈るのを目的とした裏の人間達

「はあ、はあ、……………それにしても人間というのはいつの時代も変わりませんねえ」

いつの世も人間は 妖怪を恐れ、悪と決め付けている愚かな生き物だ
人の噂、伝承に躍らされるだけで 本質を見ようとしない

「はあゝ どうしましょう」

樹の影に隠れて これからどう逃げようか考えていたその時 払い屋が放った矢が まるで蛇のように樹の間を縫いながら 私に迫って来た

「っ!!!?!」

私は咄嗟に 横に跳んだが完全に避け切れず 矢は私の足に突き刺さった

「ぐっ!!!」

私は 凄まじい激痛にその場に倒れこみ 動けなくなった

「やっと大人しくなつたか 妖怪め」

払い屋は冷たい眼で私を見下ろす

…… ああ まただ またこの眼だ 何処までも冷たく 冷淡で 冷酷で そして 何処までも弱々しい眼

「……もう抵抗しないのか？しなければ 殺すぞ」

払い屋の低い声が 聞こえる

…… ええ もういいです もう逃げるのにも 蔑まれるのにも疲れしました

考えてみれば 私は十分生きました 悔いはありません

「ふん つまらん 呆気ない幕切れだった」

払い屋は そういうと鞘から刀を抜き 大きく振りかぶった

…… 恐れなんてない…… 悔いなんてない……なのに……なぜ こんなに胸が苦しいのだろう

……なぜ 涙が溢れてくるのだろう

…… 私は…… 本当は……

……そして 払い屋は刀を振り下ろそうとした時 私は 静かに目を閉じた

ガキンッ！……！

しかし、その瞬間 金属同士がぶつかり合う音が聞こえ 私は思わず目を開けてしまった

「……何をしてるの？」

そこには 恐ろしい程に 冷たい殺気を放つ 一人の子供が 私を

庇うように間に立ち 払い屋の刀を 小さな剣で受け止めていた……

「とある山奥 結界内」

ハッ（　　）！！ いけません 少し寝てしまっていたようです
…………… それにしても

「おい ユウ キノコを見付けたぞ 食べたなら大きくなるかな？」

「いや それ 違うキノコにゃ」

「おっ！！ あんな所に ノコギリクワガタが！」

「季節外れすぎだろ…………… って 何を呑気に構えているにゃ！！」

「な、何だよ 急に大きな声だして……………」

「俺たちは 今 結界内に閉じ込められてるんだぞ！？ 一刻も
早く 術者を見付けるかしないと 一生迷子にゃ！！」

猫ちゃん 良い事言った！！ そうです 早く 見付けてください
旦那様？

「あっ！ 今度は カブト虫発見？」

「聞けやあ！！」

「ぶべらあ！！」

猫ちゃんの頭突き炸裂
うわぁ 痛そう……

「っ痛うゝ 何すんだ!!」

「人の話を聞け この脳みそプリン男が!!」

「何だと!!この駄猫があ!!」

「にやつ!!言ったなあ!!今日という 今日に許さん!! 地獄
を見せてやるにゃ!!」

「上等だあ!!返り討ちにしてやる!!」

……あの二人は何をしているのでしょうか?

もしかして 状況が読めてない?……バカ?……ええい この
ままでは 埒があきません こうなったら ……

私は 自分の指を噛み 一枚の葉っぱに血を垂らす

すると あゝら 不思議 葉っぱが 一人の美女に変身?
パチパチパチパチ?

「それでは 葉っちゃん お願いしますね?」

「……………はい」

「どんな手を使っても構いませんので 遠慮なくやつちゃってください?
さい?」

「……………わかりました」

ウフフ さて どうするか 楽しみですねぇ？

「「はあ、はあ、はあ、」」

「なっなあ 一時休戦といかないか？」

「そっ そうだにや」

おっ いいタイミングで 喧嘩が終わりましたね
さあ 今の内です やっちゃってください

「……………もし、その御方」

そうそう そうやって自然な感じで近付いて……………

「……………私と一緒に子作りに励みませんか？」

そうそう その調子……………って 違う！ 何を いきなり？ 発言してんだ あの駄葉っぱは！！

ああ 二人が一瞬で 遠くに……………って 何をしてるんですか！！
早く 追いなさい！！！！

「……………了解」

全く 大体から旦那様の子供を産むのはこの私です キヤツ？
(。 。) 私ったら ？ 発言？

「おいしい 何あれ？ 何なの！？ 何かやばい感じなんだけど！！」

「とにかく走れ！！ 捕まったら大事にや何かを失うにや！！！！」

「……………待ってください……………今は無しです……………本当は……………」

「「本当は？」」

「……………私とともに幸せな家庭を作りましょう」
ヒューン……

うわぁ 速ーい 人間って本気になるとあそこまで早く走れるんですね…………… って だから 違うって 言ってるでしょう ふざけてないで 早くあの二人を襲いなさい

「……………わかりました」

ふう やっと 分かりましたか 全く 旦那様との幸せな家庭を作るのはこの私です 結婚式はやっぱり和風が良いですね 新婚旅行は京都なんてどうでしょう それからそれから 初夜はやっぱり畳に敷かれた布団の上で 動物みたいに後ろから…………… ああ、旦那様 今夜は寝かさないなんて 私！私！！壊れちゃいますう…………… はあ、はあ、はああ……………（、）…………… いけせん 少し トンでいました さて、どうなったかな？…………… おお 葉ッちゃん やればできるじゃないですか 旦那様のマウントをとるなんて…………… ……
…何でしょう 嫌な予感が……………
「…………… 大人しくして下さい…………… 奪えません」

「何が！？」

「……………ボソッ 貞操」

「リンクー！急いで 離れるにゃ じゃにゃいと お前の人生が決まってしまうにゃー！」

「なっ何だか分からないけどヤバそうだ……このー！離せー！」

「くっ 何て力にゃ 引き剥がせにゃいー！」

まあ そうでしょう なんとって 私が作ったんですから力もそれなりに………ていうか あいつボソツと貞操を奪うとか言いませんでした？気のせいですか？気のせいならば良いのですが………

〔デパート内 紳士の社交場（下着売場）

ピーン（ニュータイプ音）

「どっとうしたんだい？デルフ フェイト」

「………リンクの（貞操の）ピンチですー！急いで向かわないとー！ 行きますよ フェイトちゃん」

「うん！急ごうー！デルフ アルフー！」

「はっ？何を言ってるんだい！？ちょっと フェイト デルフー！戻ってこーいー！」

番外編三 爆走

「とある山奥 結界内」

「…………ジタバタしないで下さい 脱がせません」

「やめろお 離せえ！！！」

俺は今 謎の女性にマウントをとられ しかもなぜか 服を脱がされそうになっていた

「ええい リンクを離せ！！」

隣でユウが叫び 何度も女性に体当たりしているがびくともしないこゝこいつ 痛みを感じていないのか？

「ちっ しょうがにやい リンク！！少し我慢しろにや！！」

ユウはそういうと 俺たちから少し距離をとり 全身に妖力を纏わせる…って ちょっと待て！！

「ユウ！ 何をする気だ！？」

「こいつを ぶっ飛ばすにや！！」

「待て待て！！ いくら何でもその妖力は出し過ぎだ！！ 怪我したらどうする！！」

そんな放ったら 俺もこの人もただではすまない 確かにこの人は怪しいけど俺を殺しに来た訳じゃない事はわかる

……じゃあ 何しに来たって聞かれると、わかんないけど……

「……………ナニをしにきました」

「いや 意味分かんないから！！あと 人の心を読むな！！」

そんな事を話している間にユウの妖力が どんどん膨れ上がってる
！！

「……………！？ 許容範囲外の妖力」

ここにきて初めて ユウの方に顔を向ける女性……………今だ！！

俺は 右手の人差し指に霊力を集中し左手の甲に『衝』という文字
を書き 女性の腹に掌を押し付けた

「言の葉 霊言 ぶっ飛べ！！轟衝破！！！！」

俺が技名を叫ぶと手の甲の『衝』の文字が蒼白く輝き女性は叫んだ
とおりぶっ飛び 木に激突した……………イカン……………やりすぎた……………
「……………リンク」

のわっ！！ユウがドン引きしてる

俺は急いで立ち上がると 女性の元に駆け寄った

「だ、大丈夫ですか！？すみません つい……………」

「……………」

安否を確認するも 女性はピクリとも動かなければ、返事もない

「……………返事がにやい ただの屍のようだ……………」

「言ってる場合か!!」

言つの我慢してたのに……

「と、とにかく 早く手当てしないと……」

「その必要はにやい」

「ユウ!? 何を言ってるんだ!?!」

「リンク お前も気付いている筈にや こいつ 人間じゃ……」

「そんな事は分かってる でも このままじゃヤバイだろ! ていうか このまま死なれちゃ 後味悪過ぎだろ」

「……………やれやれにや よく見る」

「えっ?」

ユウはそういつて 首で女性の倒れている場所を見るように促す

「っ!?!? 消えた!?!」

すると そこには女性の姿は無く 赤黒い血のようなものが付いた葉っぱ一枚あるだけだった

「……………何これ…怖い……」

「幻術か それとも式神のようにや 召喚術か……どちらにしろ かにやりの力を持った妖怪にや……」

ユウが珍しく真剣な顔になってるという事は、本当に強い奴なんだろう………普段ふざけてる奴分、真剣になると説得力がますな………お前にだけは ふざけてるにゃんて言われたくはなかったにゃ………」

そういつて 真剣に落ち込むユウ………失敬な!! それだと 俺が毎回ふざけてるみたいじゃないカ………って だから 人の心を読むな!! 怖いから!!

「……っで どうするにや 捜すか？」

「………いや、やめとこう 早くここから出た方がいいかも………」

さっきの人だつてビックリさせたり 嫌がらせしたりするだけで全然攻撃してこなかった もしかしたら あれは 警告だったのか もしれない

妖怪も 縄張りに入っただからといって すぐに攻撃するわけじゃない 何らかの 警告をするもの達もいる

「適当に歩いてたら 出口まで戻してくれるかもよ」

「だと いいけどにや」

俺は さっきの女性………と思わしき葉っぱに手を合わせ小さく「ごめんなさい」と謝り 女性が出てきた場所とは 逆方向に歩きだした

く?????サイドく

はあゝ 失敗です

やっぱり 式神なんて人間が考えた術式を使うもんじゃありませんねえ

まさか あんなどインランなものが出て来るなんて はあゝ 一体誰に似たんでしょう……

取り敢えずこの子は回収してつと

それにしても……

ウフフ 流石は私の旦那様 何という シビれる攻撃

それに 一瞬見せた鋭いお顔 はあゝ（＊ゝ＊）ウツトリです

……でも まだですね あの時の旦那様はあんなものじゃなかった
ウフフ 覚悟して下さい 私がかならず あの時の旦那様を呼び覚まして差し上げます ウフフ…ウフフフ…
ゾクッ！…！

「どうしたにや リンク」

「い、いや…何でもない……ちょっと 急ごうか……」

「???」

「とある山奥 神社」

「いましたか!？」

「ううん こっちにはいないよ!」

「くっ!! 大人しく留守番するわけ無いと思っていましたけど…一体何処に……」

「私 空から搜してみる」

「ええ お願いね フェイトちゃん」

「うん！」

「……はあ……はあ……はあ……やっと……追いついた……」

「遅いですよ アルフ！！ほら、あなたもフェイトちゃんと一緒に捜して」

「ええ！？ちよつと 待つとくれよ 私は二人の荷物を持ってここ迄走ってきたんだよ！？あんた達はお金を払う途中で急に走っていつちまうし、あんたの下着は妙なもんばかりだし、しかも急に走っていつちまうから店の奴等の注目あびるし、流石の私もかなり恥ずかしかつたんだからな！！」

「むむ！！こつちの方角に私のリン×ユウ探知機が反応してます！！！！」

「って 無視すんじゃないよ！！………行っちゃった………フェイトも何考えてるんだい……はあ 昔のフェイトに戻ってほしいよ………本当に………」

そういつたアルフからは形容し難い程の哀愁が漂っていたのは言うまでもなかった

番外編三 爆走（後書き）

リンク達を結界に閉じ込めた謎の妖怪 何者なのか！？そして その目的とは！？ デルフ達は 無事リンク達を見付けだす事が出来るのか！！

次回 ゼル……………もとい 異能者の伝説『正体』お楽しみに

はい すいません 一回やってみただけです 調子に乗ってごめんなさい 再生5000 PV4000 読んでくれる方達がいる こんなに 嬉しい事はありません 本当にありがとう ございます（ ）

これからも 読んでくれると嬉しいです

目標は 一万越え 頑張るぞー！！！！

それから 話が脱線しまくっててすみません

何か 収集がつかないと言いますか…………… ノリでオリキャラを登場させるものじゃないかと 反省しております

…………… もうこのまま オリジナルストーリーを突っ走って良いですか？ダメですか？

番外編四 正体（前書き）

.....まだ終わりません.....

番外編四 正体

「とある山奥 結界内」

俺とユウは 結界の出口を探すために ひたすら山の中を歩いていた

「……それにしても 山っていうのは何処まで行っても木ばかりだな……」

「……当たり前じゃ」

俺の言葉に ユウは呆れながらそういった
ずっと歩き詰めで 疲れているせいかツツコミが少し弱い

「……少し休むか 疲れた」

「……そうだにや」

俺は適当な所に座り木にもたれかかった

ユウも 俺の隣に箱座りする

「さて これからどうするにや？まだ 出口を探すのか？」

「……… やっぱり 術者を見つけるしかないのかな

あんまり 気は進まないけど……」

「……ここ迄 探しても出口は見つからないやい……結界を解く気配もにやい……やるしかにやいにや」

確かに 相手の意図は読めないが どうやら結界から出してはくれないらしい 出口が見つからない以上 術者の方を見つけるしか

ない

「それとも きついが力ずくで結界を壊すか？」

「……結構大変だと思うよ」

結界を壊すには 少なくとも術者と同等かそれ以上の力がある
俺達に気付かれずに結界内に閉じ込めた所を見ると 妖術も優れて
いる

この結界を壊すとなると かなりの重労働だろう

「……しょうがない 術者を捜して結界を解いてもらおう」

「ふむ 久しぶりの狩りにや…腕がにやる」

そう言つてユウは不気味に笑う

……… ちよつと待て

「あくまでも話に行くんだからな O H A N A S H Iに行くんじゃないからな」

「わかつてるにや…でも 敵だった場合 容赦しにやいにや」

い、いかん ユウから何か どす黒いオーラがでてる

「で、でも どうやって捜す？」

「その辺に 妖弾を撃ちまくつて炙り出すにや」

「ダメに決まつてるだろ！！」

全く 何を物騒な事を言つてるんだ ユウは……

「むう にやらどつするにゃ？出て来て下さい、とでも呼び掛けるのか？」

……………呼び掛け？

「それだー！」

「……………は？」

「なるほど 呼び掛けかぁ それは 考え付かなかった ナイス
アイディアだ ユウー！」

「（・・・）」

あれ？何かユウの目が点になってるが何でだ？

「……………冗談で言ったんだが まさか 本気にするとは……………」

今度は 呆れたように俺を見るユウ

「何だよ 俺の顔に何かついてるか？」

「……………バカの神様が憑いてるにゃ」

「……………ケンカ売ってるのか この野郎」

いきなり失礼過ぎだろ

「はぁ よくかんがえろにゃ 呼び掛けて出て来るにやら苦勞はしにゃいにゃ」

「やってみなきゃ分からないだろ？もしかしたら 素直に出て来てくれるかもしれないぞ？」

「……お前の頭はいつからそんなにやに おめでたくなっちゃったんにや？」

「……ちよつとムカ（、へ、）

「……そんなに言っなら見てろよ 俺が上手く説得してやるから」

「……無理だと思っけどにや」

バ、バカにしてえ！！

見てろよお

スウーッ

大きく息を吸ってえ

「術者に告ぐ 術者に告ぐ 今すぐに結界を解除して我々を解放しろ 聞こえるかこの結界の術者よ 聞こえたら返事をしろ」

………返事なし あれえ？

「………やっぱダメにや」

「ま、まだだ まだ終わらんよ！」

俺はもう一度息を吸って

「聞こえるか術者よ こんなことをして恥ずかしいとは思わないの

か！？故郷のお母さんも泣いてるぞ！こんな妖怪に育てた覚えはないってな！！」

「いや、お母さんどころか 術者の顔も知らにやいだろ お前」

「……………結界を解いてくれるのなら ここにいるユウを君に献上しよう どうだ？」

「にやに しれつと俺を生け贄に捧げようとしているにや！！」

「…………俺だつてつらい！でも 助かるためにはこうするしかないんだ…………くっ…………」

「にやにが…くっ…だ！！ このバツタ男！！ おい 術者！！このバカをやるから 俺だけ逃がせ！！！」

「あつ！てめつ 友達を売る気か！！この 人でなし！！！」

「お前が言つにや！！ この腐れ外道！！！」

睨み合う今にも 一触即発な俺達
すると そこに…………

「旦那様をくれるというのは本当ですか！？（ ）」「
そっいいながら、一人のバカ…………もとい 女性が草むら現れた

「……………」

つて 誰！？ も、もしかして

「……………もしかして、この結界を張った人？」

「はい（ハ・ハ）その猫ちゃんが逃がしてくれたら旦那様をくれると言っているので 出て来ました」

なっ！ そ、そんな…それじゃあ つまり……

「……俺の説得よりユウの説得の方が良かったって事か？…」

「…気にするとそこそこかには！？このツッコミ満載にや状況は放置かには！？」

はっ！！い、いかん 余りの超展開に混乱してしまった…冷静に…
…深呼吸……よし！！

「もう一度聞くけど、ホントーにこの結界を張った犯人なんだね？」

「はい 犯人です（ハ・ハ）………えっ？………犯人？」

「よし ユウ！！ ひつとらえろお！！！！」

「了解にや！」

「えっ！？ ちょっと？！ 話がちが…キャアアア！！」

「うう 旦那様 ひどいです あんまりです」

俺の呪縛符の鎖に縛られながら、しくしくと泣きながら俺達を非難した

「………今更 言うのにもにやんだが、話をするんじゃないかった

のか？」

うん…………そのつもりだったんだけど…あの笑顔を見てると何かイラッとして…………つい…」

ホント 何でこんなことを…………

「…………そうですか 旦那様はこういうのがご趣味だったんですね？
もう それならそうと言ってくだされば良いのに…………私も…旦那様にならナニをされても…………キャッ） （言っちゃった）
）」

…………なるほど…………原因がわかった

この人の雰囲気 どこことなくデルフに似てる

「…………リンク こいつは何とにやく危険な匂いがするにや…………今すぐに始末しよう…………」

「ま、まてユウ イラッとするのはわかるけど落ち着いて」

まずは話を聞かないと…………始末するのはその後でもできる…………

「では、これより尋問……………もとい…………お話を始める」

O H A N A S H I I じゃないよ…………

「まず 貴方は何者ですか？」

「貴方の妻です） （」

「なるほど、なまものか…………」

「いや、生「ミ」じゃ……」

「ちょっと まともに聞く気あるんですか!？」

「「まともに答える気な（にや）いだろ!！」」

「私は 大真面目ですよ!！」

「ほほう だったらその旦那様ってのは 誰の事だ？」

「えっ?憶えてないんですか？」

女性は、潤んだ瞳でこちらを見上げてきた…… な、何だ その意味
深なセリフは……

「……リンク また何かやらかしたのか？」

「またって何だよ! その言い方だと いつも俺が何かしてるみた
いじゃないか!」

全く 失礼な!!俺は産まれてこの方 人に迷惑をかけるような事
なんて……

「…… あんな事までしておいて…… あんまりです」

女性はそういうと またしくしくと泣きだした…… えっ?えっ?
な、何?何されたの?

「……リンク……責任とれにや」

ちょ、ちょっとユウ!! 何だ その汚物を見るような目は!?
何もしてないからな!? 本当だよ!!!

「ちょ、ちょっと 待ってよ!!! 本当に何のこと!?! お、俺は何も……」

「この期に及んでまだシラをきるとは 見損にやったにや…リンク」

「うわあああん 誤解なのにい ユウのバカアア!!!」

俺はついに耐えられなくなって、泣きながら走り去った

チクシヨオオオ 家出してやるう!!!!

くリンクサイドアウトく

くユウサイドく

……まさか、あんなに号泣するとは、少しやり過ぎた……

まあ いい 取り敢えず作戦通りだ

……さて、

「……いつまで そんなに臭い演技してるにや 本性現せ クソ狐!!!!」

「……フフ……ばれちゃいましたあ」

そういつて女は妖しく微笑んだ

その微笑みを見た瞬間 俺の背筋に寒気が走る

………何て 殺気だ

「臭い演技って言うなら、貴方もじゃないですか? 何ですか その口調? 猫又のそんな喋り方聞いた事ありませんよ?」

「そうだろうにや 何せリンクが考えたからにや」

俺がリンクに仲間として、家族として、迎え入れてもらった日 あいつは猫だからという理由で語尾ににやっと付ける事を提案した
今 思い出しても笑えてくる

「……………そうですか あの人が……………」

……………俺の言葉に女の表情が変わる……………やはり、こいつの狙いは

……………

「答える にやぜリンクを狙う？ お前の目的は何にや」

「…それもお見通しですか……………目的はあの人を私の旦那様にする事です（ ）」

「……………にやぜ？」

「何故って変な事を聞きますね 好きだからですよ」

「……………結界内に閉じ込め、変にや式神で襲わせたのは？」

「結界内に閉じ込めたのは 愛の追い駆けっこをするため、あの式神は旦那様を昔の旦那様に戻すためです……………まあ どれも失敗しましたけどねえ」

……………なんだ？愛の追い駆けっこって……………まあいいや 考えるだけ無駄だ……………それよりも 気になるのは……………

「昔のリンクとはどういう 意味にや？」

「そのままの意味ですよ……………ご存知無いですか？そうですね 今から二年くらい……………」

「っ！！！！」

ドオウツ！！！！

女のその言葉を聞いた瞬間俺は口から妖力の塊を女に放った

……………だが……………

「……………危ないですねえ」

「ちっ！」

紙一重で躲しやがったか…リンクの呪縛符をいとも簡単に抜け出すとは、思った通り只者じゃないな……………

「……………いきなり何するんですか？」

「…悪いにや 俺は昔のリンクより今のリンクの方が気に入ってるにや」

昔のリンクは親兄弟もおらず孤児院暮らしだったが、不思議な力を持つあいつを理解してやる奴なんて一人もいなかった

暗く、笑顔もなく、絶望したあいつの顔を見るのは二度とごめんだ

「……………貴方たちと出会って旦那様は変わってしまいました とても穏やかになり、かつての冷たい表情を一切見せなくなってしまいました……………」

「その何が悪いにや」

「悪くはないんですけど…やっぱり 私としては昔の方が良かった

なあって」

「……そうか、諦めるにや あいつが昔に戻る事はもうにやい」

「いいえ 簡単な方法が一つあります……… 貴方を殺せば良いんですよ」

……なるほど それは名案だ………が

「俺を簡単に殺せると思うなよ クソ狐!!」

「……それはこちらのセリフですよ？教えてあげます 猫又ごときじゃ 私には勝てないことを……」

女の頭から狐の耳がはえ、背中から、一尾の尻尾が出てきた

「金色の尻尾!?まさか……」

「はい(^ - ^) 名は玉藻御前 白面金毛九尾の狐でございます」

「日本三大妖怪の一角か 生きていたのか……」

「ええ 封印されてただけですから……… そのせいで力が随分弱まりこの時代の払い屋ごときに負けそうになりましたけど………」

「にやるほど その時にリンクに助けられたわけか……」

「はい あの時の旦那様は それはもう凛々しく冷たく格好よく、その場にいた払い屋達をバツバツと薙ぎ倒し……… はあ 今思い出してもウツトリです(*´、*´)」

……あの野郎 払い屋と戦った何て聞いてないぞ

……それにしても、厄介な奴に目を付けられたな……

「ウフフ 今更逃げようとしても無駄ですからね この辺りに遮断結界を張らせて頂きました この結界は外から干涉されることはありませんし、結界を解かないかぎり出る事も出来ません」

「はいはい 説明どうも 要はバリアーみたいなもんだろ？」

「そういう事です じゃあ始めますか 哀れな子猫ちゃん」

「一尾の狐ごときが舐めるな!!」

「ユウサイドアウト」

「急に呪縛符が解かれた感じがしたから 戻って来たけど……何だ？この結界は……」

バチッ!!

「痛っ!？ お、俺がいない間に何が起こってんだ!？」

「とある山奥 結界外」

ピクッ

「この気は……ユウちゃん!？……誰かと戦ってる……相手は……誰？知らない奴」

「デルフ 空から探したけどリンク達見付からないよ！」

「……山を降りたんじゃないのかい？」

「……いえ どうやら 少し焦り過ぎていたようです……」

「えっ？どういうこと？」

「……こっちはです」

「あつ！おいデルフ 何なんだい あの落ち着き様は？さっき迄とは偉い違いじゃないか」

「……いこ アルフ デルフのあの様子 きっとリンク達の居場所がわかったんだよ」

「……私は何も感じないけどねえ」

「とある山奥 遮断結界内」

「ユウサイド」

さて、そんなこんなで今 俺は九尾の狐と戦ってるわけだが……

「……なかなかやりますね 子猫ちゃん」

「……まあな」

流石は 腐っても九尾の狐（今は一尾だが）力が落ちていても充分強い

「…これは私も少しだけ本気でいかせてもらいますね」

狐の妖力がさらに上昇した！？

「……それでは、燃やし尽くしてあげましょう」

狐が不気味に微笑んだ瞬間　狐の周りに火の玉が現れた……数は……五個か……

「……ウフフ これだけではありませんよ……」

「炎帝・狐火！！」

狐がそう叫ぶと狐の周りの火の玉が形を変え、狐の様な姿になった
…… ああ なるほど だから狐火か……
って そんな事 言ってる場合じゃない

「さあ 狐火ちゃん達 狙いはあの子猫ちゃんです 焼き尽くしてあげて下さい」

狐が俺の方を指差すと狐火達はまるで本物の狐の様に襲い掛かってきた

おいおい マジか……
「ちっ!」

急いで後ろに飛び
まずは先頭にいる狐火に妖弾を放つ

ボ
ワ
ッ
!
!

直撃……しても形が一瞬崩れるだけでまた元に戻る

……なるほど この程度じゃ消えないか……

「…………おっと！」

少し思案していたら 別の狐火が正面から襲ってきたので それを
躲す

「むう 的が小さいと当てにくいですね」

ほつとけ！！悪かったな 小さくて！！

「それなら こうです！！」

今度は狐火、三匹同時に襲い掛かってきた

「それを待っていた！！」

俺は首を左に捻り瞬間的に妖力を解放 そのまま口から光線状の妖
力を放ち 思い切り首を横風ぎに右に捻り、三匹の狐火達に妖力を
浴びせた

シュバツ！！！！

妖力を受けた衝撃で三匹の狐火は消滅した

………残るは二匹………いや、本体もあわせて三匹か……
「……やりますね」

「っ！！？」

不意に背後からあの狐の声がした

い、いつの間にか後ろに!?

「……私 気配を消すのも得意なんですよ」

ガッ!!

慌てて後ろを振り返ろうとしたが、後ろから押さえ付けられる

「ぐっ!!……このっ!!」

俺は完全に妖力を解放しようとしたが……

「……いいですね……貴方には仲間がいて……私にはそんな人はいない……ずっと一人ぼっち……」

「……な……に……」

背後から聞こえてくる狐の消え入りそうなほど小さな声に一瞬だが……抵抗を緩めてしまった

ボウッ!!

その瞬間 左右から残る二匹の狐火が俺にむかってきた

……くそっ 逃げられない……

ドウッ!!!!

凄まじい爆発による衝撃と熱さ、そして全身を貫く激しい痛みと浮遊感……俺は吹っ飛ばされたのか……それにしても……敵の言葉に動揺するなんて俺もまだ……まだ……にや
くユウサイドアウトく

く玉藻御前サイドく

…私は 目の前で燃え盛る炎 そして今まさにその炎の中に落ちて
いく一匹の猫を見ていた……
胸がとても痛い…… 苦しい…… なぜ？こんな感情なんて…… もう
私には…… 無いはずなのに……

「……………ごめんなさい…………… 猫又さん……………」

私は思わず目の前の猫又に謝った

……………猫又は、炎の中に落下し 姿が見えなくなった… もうじき
地面に叩きつけられる…………… そうなったら妖怪だとしても生きてはい
ないだろう…………… いや、仮に生きていたとしてもあの炎の中では……………
私がそう思っていたその時……………

ダッ！！

いきなり私の横を何かが横切り……………

ブワッ！！

その直後に後ろから突風が吹き荒れた

「っ！？ な、なにが！？」

その突風は炎にまで及び 瞬く間に炎を吹き消した ……………ま、
まさか…………… 今の……………

私はギョツとしながら、煙が立ちこめる場所を凝視した
そこには……

「……ふう……間に合ったあ」

猫を抱き抱え、安堵の表情をした少年がたっていた

く玉藻御前サイドアウトく

「とある山奥 結界前」

「………ここですね」

「ここって何も無いじゃないか……」

「デルフ 何があるの？」

「まあ 見ていてください」

「って 何で剣なんかだしてんだい？ ていうかどっからだした！
？」

「じゃあ いきますよ」

「無視か！！」

「アルフ シッ！だよ」

「フエイト」

「ふっ！！」

ズバッ!!

「っ!?! 何だい!?! この裂け目は?!」

「結界!?! でも何も感じなかったよ!?!」

「それだけ術者が優秀なんでしょう さあ 行きますよ 急がないと.....!!!!」

「ど、どうしたの? デルフ」

「..... ユウちゃんの妖気が消えた..... やられた.....」

「えっ!?! やられたって.....」

「ど、どういう事だい!?!」

「..... 急ぎましょう 思っていたよりヤバそうです」

番外編四 正体（後書き）

.....次でようやく終わります.....多分

番外編五 決着？（前書き）

……ようやく番外編終わりです

番外編五 決着？

「とある山奥 遮断結界内」

「……ユウ しっかりしろ ユウ！」

「……うるさい……少し静かにしろにや……」

「良かった 生きてたかあ」

「当たり前にや……俺がそう簡単に死ぬか……」

「うん、知ってる」

「でも、少し疲れたにや……」

「ああ 後は俺に任せてゆっくり休め」

「……リンク あいつは……」

「んっ？」

「……いや 何でもにやい……お前の好きにや様にやれにや」

「おう……」

リンクはユウを優しく寝かすと周りに結界をかけた

「さてっと……何かさっきと雰囲気が違うな……あ、耳と尻尾があるからか……狐？」

「……………はい、名は玉藻の前 白面金毛九尾の狐でございます」

「……………九尾の狐……………やっぱり身に覚えが無いな……………」

「……………今は力が弱まっているため一尾の狐……………貴方に助けられたのもその時です」

「……………狐……………もしかして払い屋とかいうのに追われてた狐は……………」

「はい 私です」

リンクが憶えていた事で玉藻は柔かな微笑みを見せる

「……………その君が何でこんなことを……………人間に対する復讐か？」

「……………はい そうです」

「……………本当に？」

「はい、私は昔 陰陽師に住みかを終われ、何千という人間の放った矢によって、殺されかけました……………」

「……………九尾の話は知ってるよ……………その後 君は自身を封印し その時の妖力でその場にいた人間を殺した……………確か 殺生石……………だったかな」
「……………人間とは脆弱な生き物ですね……………自分とは違う力を持ったものを恐れ、蔑み、殺す……………そして自分を正当化する……………実に愚かです」

「……………そういう奴らだけじゃないよ」

「……………貴方は人間がお好きですか？」

「んっ？ 嫌い」

玉藻の問に即答するリンク

「……………でも、人は好きかな」

「……………意味がわかりません」

「俺が好きなのは 優しくてあつたかい心だよ、それは人間、妖怪
関係なく持つてる……………俺はそれが好きだ」

リンクはそういつて、純粹な笑顔を見せた

その笑顔は歳相応の無邪気な笑顔だった

「……………そうですか……………」

だが……………対する玉藻は苦しそうな表情する

「……………リンク……………すみませんが 私は人間が嫌いです……………そして、
今のあなたも……………」

「……………ちよつと傷付いた」

「……………昔の貴方はそんな笑顔は見せなかった……………貴方に無駄な
希望を与えたのは 仲間達ですね？」

「うん、無駄じゃないけどね……………もしかして そんなくだらない
理由でユウをこんなめにあわせたの？」

「……………ええ 私にとってその子は邪魔ですから……………」

「……………そう」

シュツ！！

玉藻の答えを聞いた瞬間 リンクは薄く笑うと一足飛びで玉藻との距離を詰め…
ズバツ！！

一瞬で札からコモクの剣を出し 横風ぎに切り払った
「っ！！？」

だが 玉藻はこれを後ろに飛び、紙一重で躲す

「……………猫又さんといい 不意打ちが好きみたいです」

「……………ぶっちゃけると人間はどうだっていいんだよね…復讐したいなら勝手にやれ…だが、家族は違う」

リンクは、そういうと殺気の含んだ目で玉藻を睨む

「……………フフ……………良い目ですね……………ゾクゾクしちゃいます」

だが、玉藻はリンクの殺気に平然としているばかりか逆に嬉しそうに、妖しく微笑む

「……………でも、まだですよ 貴方の本気はそんなもんじゃないはずで
す」

そういつて玉藻は 手の平から炎の塊を出し、それをリンクに放った

「ぶっ！！」

リンクは、上半身を大きく反らしこれを回避

「……まだまだ、いきますよ！」

しかし、玉藻は続けて炎を放つ

「ちい！！」

リンクは、全速力で横に走り 木の影に飛び込み 隠れる

「……フフ……隠れても無駄ですよ……『炎帝・狐火！！』」

玉藻の周りに火の玉が現れ狐の姿になった

「……行きなさい……獲物はあの木の影です」

玉藻が木に手を向けると、狐火達は一斉にリンクのいる木の影に突っ込んで行った

ドオオン！！！！

そして、大爆笑

リンクのいた場所に巨大な火柱が立ち上った

「………終わりですね………案外呆気ないものでした……まあ、人の命など儚………」

玉藻がそう言い掛けた……その時………

ブワッ！！

突然、竜巻が立ち上ぼり、一瞬にして 炎を掻き消した

「キャアツ!!?? な、何事ですかぁ!??」

突然の突風に吹っ飛ばされたが、何とか木にしがみついた

「……………ふう」

竜巻がはれると、その中心には 剣を構えたリンクが立っていた

「…い、今のは何ですか?」

木にしがみついたままの 玉藻が驚愕の面持ちで尋ねた

「…………大回転斬りだ…………いや、竜巻回転斬りと命名しよう」

「…………た、竜巻って…………」

「さて…………今度はこちらの番だな」

リンクはそういうと玉藻と同じように手から炎を出した

「!!!?? リンク 貴方は炎術も使えるんですか!??」

リンクの力に玉藻は心底驚く

「……………何だかよくわからんが、くらえ!!」

お返しとばかりに玉藻に炎を放つ

「くっ！！ そんなもの効きません！！」

思い切り木を蹴って、その反動で炎を躲す

「そこだ！！」

リンクは着地の瞬間を狙って 今度はさっきよりも靈力を込めて放つ

「甘いです！！」

しかし、それを読んでいた玉藻は 着地と同時にリンクの方向に炎を放った

ドウッ！！！！

お互いの放った炎と炎がぶつかり合い爆発、リンクと玉藻の間に立ち込めお互い前方の状況が分からなくなった

（玉藻サイド）

……………リンクの攻撃を防ぐためとはいえ これは少々ヤバイですね
これでは、前の状況が分かりません

それにこの煙のせいで周りの視界も奪われています

……………さて、どうしたものか

それにしても、炎術まで使うとは、ちょっとビックリです

靈力を炎に変える一族は滅んだはずですけど……………

……………まさか……………

いえ……そんな事は後回しです

今は戦いに集中しないと……何をしてでも昔のリンクに戻ってもらわないと……そして……私を……

ゾクッ!!

私が少し思案した瞬間　不意に背筋に冷たいものが走った

……く、くる!!

ボワァッ!!

そう思った瞬間　目の前の炎に一瞬円形の穴が開き　凄まじい速さの衝撃破が飛んできた

「がふっ!!?」

咄嗟に避けきれず　衝撃破は私のお腹に直撃、そのまま後ろに吹き飛ばされ　木に叩きつけられ背中に鋭い痛みが走る

「うぐっ!!」

……あ、……マズい……立ち上がれない
上体を起こそうとしただけで、お腹に鋭い痛みが走った

「ぐっ!!……ううん!!」

……ダメです……手にも力が入りませんね……うう　まさか
一撃でダウンなんてちょっと悔しい……
バシユッ

そうこうしているうちに、目の前の炎が真っ二つ割れ、割れた炎は一気に掻き消えた

そして、その中心から冷たい目をしたリンクがゆっくりと歩いてきた

ゾクゾクッ!!!

その目に見られた瞬間　私の全身に電撃が走った

今、目の前にいるのは死神と同じ……それが、ゆっくり一歩、また一歩と近づいてくる

それなのに、私は今　笑っていた

「…………死ぬのが嬉しい?」

私の目の前まで来て、私を見下ろしながらリンクが尋ねてくる

「…………はい、私はもう十分行きましたから…………それに　もう疲れました」

「…………疲れた?」

「…………はい、疎まれながら生きる事に疲れました…………」

「……………」

「人間は　私の事を妖怪だというだけで、化け物扱い　本当にバカな生き物ですね……………」

「……………」

「人間達は　殺生石って呼んでましたっけ?…あれで人間達が死ん

でいく姿は気分爽快でしたよ……」

「……………本当に？」

「はいっ！ それからずっと眠ってたんですけどね あのバカな払い屋のせいで 起こらされるし また妖怪って事で追い掛けてくるし もう最悪でした……」

「……………そう」

「っで その時に貴方に助けられたんですよ ウッフ… 貴方に倒される払い屋…傑作でした…」

「……………そう」

「それから、邪魔だったから 貴方の仲間を殺そうと……………」

「……………そう」

「……………それから……………」

……………くっ 私はもうすぐ愛する人に殺してもらえる……………それが私の望み……………嬉しい……………嬉しい筈なのに……………どうしてこんなに胸が痛むんでしょう……………」

「……………もう一度聞くよ 死ぬのが嬉しい？」

「……………はい」

「……………じゃあ その涙はなに？」

「っ!」

私はリンクにそう言われて自分が泣いていることに気付いた

「……………な…んで?」

「もう 自分に嘘を吐くのはやめなよ」

……………うそ? 私が?…………

「ごめんね 気付いてあげられなくて…………君が人を傷付けて喜ぶような奴じゃない事は、分かってた筈なのに…………」

そういつてリンクは本当に申し訳なさそうな表情になる

「本当にごめん 辛かったな…淋しかったな…もう 大丈夫だから…………もう 一人ぼっちにさせないから…………」

リンクはそういうと私の頭を優しく撫でた

私はその瞬間 自分の気持ちが抑えきれずにリンクに抱きついた

「…………もう嫌です!!私は何も悪い事なんかしていません!!それなのに、みんな…………みんな私を化け物だって…………私は…………私は…ただ 人から愛されたいだけなのに…………もう 一人ぼっちは嫌です!…………」

止まらない…………抑えられない…………

私はリンクに胸の内を打ち明け そして子供の様に泣いてしまった

「大丈夫だよ」

リンクはそういつていつまでも 私の頭を優しく撫でてくれた

く玉藻サイドアウトく

「……………落ち着いた？」

「……………はい……………ですが、もう少しこのままで……………」

玉藻はリンクに抱きついたままそう答えた

「んっ」

リンクもそのまま 玉藻の頭を優しく撫でる

「……………はぁ 頭を撫でられるのって良いですねえ 癖になりそうですう（＊、＊）」

玉藻はウツトリしながらそんな事を言う

「そ、そう？それは 良かった」

「少し残念なのは まだ子供だということでしょうか…これが 大人だったらこのまま……………きゃっ（）」

「……………」

大人だったらどうするのか聞こうと思ったが 何だか聞いたらヤバ

そうだったのでやめた

「ね、ねえ そろそろいいかな？」

そういつてリンクが離れようとするが……

「ええゝ あと5分ゝ」

「いや それは寝起きの時のセリフで……」

「むう 良いじゃないですか……いつ また ころうできるか分からないんですから」

「いや、これからはずっと一緒にいるんだから……」

「……………えっ？」

ワ、ワンモア……ワンモアプリーズ……」

「えっ？ だから これからはずっと一緒何だから……」

ズキューン！！

「はうつー！！（／／／／）」

何処からともなく銃声が聞こえ、それと同時に玉藻は胸を抑えながら倒れた

「えっ！！ちよっ！！大丈夫か！？」

リンクが慌てて駆け寄ろうとした時……

カバツ!!

ビクッ!!

玉藻がいきなり起き上がった

「だ、大丈夫?……」

リンクがビクビクしながら尋ねると

「旦那様!!」

「は、はい!？」

「今のは、間違いなく俺の嫁発言でしたよね!？」

「はっ!？ よ、嫁!？ えっと 嫁って 結婚した時に言う言葉で 結婚ていうのは男女が家族になることで……俺は男……玉藻は女……これからは家族同然……つまり、玉藻は嫁?なのかな……」

「言いましたね!？ 今、嫁って言いましたね!？ ううう!! やったあああ!!!!旦那様ゲットだぜ!!!!」

リンクの答えにおおはしゃぎする玉藻

「何かよく分からないけど あんなに喜んでるし まあ いつか……殺気!!!!」

ドオオン!!!!

リンクが凄まじい殺気を感じ 咄嗟に横に転がると リンクのいた
場所が爆発した

「……あら ごめんなさい 手が滑りました」

「デ、デルフ!? って 手が滑ったって何だよ!! 当たったら
死ぬぞ!? あれ!!」

パチンツ!!

「フェイトちゃん アルフ」

「っ!! 何だこれ!? 動けねえ!!」

「…… バインドって言うんだよ」

「……とりあえず、一発……いや、十発 殴らせな」

「何で増える!? ていうか フェイト 何でこんなものを俺にか
ける!!」

「ふふ なんででしょうね?」

「クスクス 何でかな?」

「（ニヤリ） なんてだろうねえ?」

「ちよつ ちよつと待って みんな!! 目が……目が笑ってない
よ!?

ご、ごめんなさい!! 何か分かんないけど ご、ごめ……ギャアアア
アアス!!……!!」

「.....やれ.....やれにや」

番外編五 決着？（後書き）

次回は 温泉旅行

第十話 波乱の温泉旅行（前書き）

なのはの心境を書くのって意外に 難しい

第十話 波乱の温泉旅行

くリンクサイドく

さて、なんやかんや色々な事があつたが全て丸く収まり
今、俺達は電車で旅館へと向っていた

「それにしても、動物も連れてきていいなんて 珍しい旅館だな」

「まあ 俺としては助かったけどにや」

確かに これで動物お断りだったら……………ユウを隠さなきゃいけない
かった

「バッグの中は暑いんにや」

入ったことないから分からないけど、猫がバッグから頭だけ出して
いる姿は中々萌えるものがある

「にしても 遅いねえ この乗り物 飛んだ方が早くないかい？」

「こらこら、誰かに見られたらどうするんだ？」

「あたしとフェイトが そんなヘマするわけないだろ？」

そついつて腕を組んで指をトントン動かすアルフ

……… 結構イライラしてるな今にも 飛び出しそうだ……… しょうが
ない

俺はアルフにそつと近づき小声で隣を見るように促した

「……………となり？……………フェイト？」

見ると フェイトは電車の窓から外を興味津々に眺めていた
多分 電車に乗るのは初めてなんだと思う

「フェイトも 楽しそうなんだ 我慢してくれ」

電車の窓から知らない町並みを見る
旅行の楽しみの一つだ

「……………こうして見てると普通の女の子だねえ」

アルフはフェイトを愛しそうに見た

「……………アルフ……………少し年寄りくさいぞ」

「うるさいよ！！」

……………グーはやめてほしい……………

「ふああ……………何だか眠たくにやってきたにや……………リンク……………膝
借りるぞ」

そついつてユウは 座っている俺の上に乗り、丸まって寝てしまった

「っ！！？？だ、旦那様の上で寝るなんて……………何てうらやまけしか
らん事を……………」

……何か玉藻がめちゃくちやこつちを睨んでる
なんだ？

「こうなったら 私も子狐に変化して 旦那様の上に…キヤア」
）」

……一度玉藻を病院に連れていこうか本気で悩んできた……

「……はあ 何だか暇ですね……音楽でもながみましょうか」

「……他の乗客に迷惑だろ」

「……誰もいませんよ？」

「えっ！？」

そういわれて見れば 誰も乗っていない
貸し切り状態だ……

「というわけで ながしますよ」

デルフはそういうと胸のポケットから携帯電話を出した

……… ちょっとまてい！！

「お前 携帯電話なんていつの間に………」

「リンク 世の中には知らない方がいい事もあるんですよ？」

「どういう意味だそれ！！」

まさか 盗んできたのか！？」

「……リンク 人間というのは幻術にかかりやすいですね」

「今すぐ帰るか 自首してこい!!」

「…………じゃあ ながしますね」

えっ!?!あれ!?! 「冗談じゃないの!?!」

「ポチつとな?」

???

デルフがボタンを押すと 携帯から軽快な音楽が流れだした
おお かつこいいな

?ワン トゥー スリー フォー ワン トゥー
ウル ラーセン?

ピッ?

「あつ! ちよつと何で消すんですか?」

「当たり前だ!! お前はこの小説を消す気か!!」

「…………むう ピッタリの曲だと思ったんですけど……」
「電車じゃなくて 車ならな!!」

全く なんて危ない奴なんだ

……………何だか 波乱の温泉旅行になる気がしてきた
くリンクサイドアウトく

なのはサイド」

今日はすずかちゃんとアリサちゃんと一緒に旅行なの　今、一緒に
旅館に向かっています

「温泉楽しみだね」

「ええ　何だか美容にもいいらしいわよ」

アリサちゃんもすずかちゃんも楽しみにしているみたい　私も楽しみ
早くつかないかなあ

「なのはサイドアウト」

第十話 波乱の温泉旅行（後書き）

どうも バードックです

ようやく 番外編も終わり 本編に戻れました

ふむ しかし、玉藻編の最後がいつもよりも再生数が多かったのは驚きました

まあ Gとの戦いの方が多かったですが……………

因みに 友達の話では 本編より番外編の方がまだ ましらしいです

まして何だよ！！

お世辞でもいいから 面白いつていつてよ！！

それから 本編の進みが遅すぎるとも言われました

申し訳ない…………… ちまちまやっていこうかなあと思ってます

どうにも ストーリーの進ませ方がどヘタでして……………

はあ 文才と発想力と表現力が欲しい……………

第十一話 再会

〔旅館内〕

くリンクサイドく

「海鳴旅館って言ってたな まああの所じゃないか」

「はいはい ピイピイ言っていないで荷物を部屋に運んで下さい」

「へーい」

「リンク 私達温泉に行ってくださいねえ」

部屋に着くなりデルフ達女性陣は温泉に行ってしまった

「さて じゃあ俺は少し散歩してくるか

ユウも行かない？」

「いや 俺は寝る」

ユウはそういつて座布団の上で丸まった

（むう 俺一人か……）

少し淋しい気もするが とりあえずこの旅館内を見て回ろうと俺は部屋を出た

〔旅館内 温泉〕

「いやぁ 温泉何て久しぶりです
フェイトちゃん達はとうですか？」

「……………温泉に入るの初めて……………」

何と！！ ではこれが初体験と言う奴ですか

「すごく 気持ちいい……………」

そういつてフェイトちゃんは小さな笑みをつかべる

「はぁ 確かに極楽だねえ」

アルフも頭にタオルを乗っけながら気持ちよさそうに目をつぶる

「アルフ 年寄りくさいですよ」

「んなつ！？ デルフまで 私を年寄り扱いするんじゃないよ！！」

「あはは 冗談ですよ？」

「つたく……………」

……………それにしても……………

「んっ？どうしたんだい？デルフ っていうか何処見て……………」

……………くっ！！何て大きさ！！
もにゅ

「うわ！？ ちょっと何処触ってんだい！」

「…………胸ですけど…………むむむ…………おっきくて、柔らかくて、形もいいなんて…反則です！！」

神はなぜこつも違う物を与えるのか…………

「反則って こんなもん大きくても邪魔なだけさ」

「うう 私もそんな言葉を言ってみたい……………」

もみもみ

「って いつまで触ってんだい！」

ゴッソ…！！

「ぎゃん…！！」

…………グーはやめて…………

「二人とも あんまり暴れると他の人に迷惑だよ？」

「…………他の人って、誰もいないじゃないか フェイト」

「えっ？…………あれ？おかしいな…………」

…………いつの間に出たんだろ……………」

「…………？ でたも何も 最初から私達以外に誰もいなかったじゃないか……………」

「……………えっ!？」

アルフの言葉にフェイトちゃんはかなり驚いている　　おやおや
この反応もしかして……

「……………フェイトちゃん……………」

ビクッ

「な、なに？」

私はスツとフェイトちゃんに近付くき耳元で囁くと体をびくつかせた
声も少し震えている

「幽霊つて水場に集まりやすいつ知ってました？」

「ゆ、ゆうれい?……………」

私の言葉にフェイトちゃんの体が震えだした

「どうしたんですか?フェイトちゃん　身体……………震えてますよ?」

「……………うう……………」

「幽霊つて　自分と波長が合う人にとり憑くらしいですよ?
もしかして　フェイトちゃんが見えたのも……………」

「……………うう……………アルフ　デルフ　本当に見えなかったの?」

フェイトちゃんは涙目になりながら、私とアルフを見た
……………　ちょっとやりすぎました

「おい デルフー！！ フェイトを泣かすんじゃないよ！！」

「わぁ！！ 待って待って 謝りますから拳骨はやめて！」

「フェイト 心配しなくても幽霊なんてこの世にいるわけないさ」

「大丈夫です！！ 例え幽霊や妖怪に狙われても私達が守ります！」

「幽霊を否定しろ！！」

ゴッソーン！！

「あべし！！」

ず、頭蓋が、頭蓋が陥没する！！

「…………… 本当に…………… 大丈夫？」

フェイトちゃんはなおも涙目で聞いてくる
かわいいですねえ

「ええ 大丈夫です！！」

私が力強く言うと フェイトちゃんは安心したように笑った

「まったく 私はそろそろあがらせてもらっよ」

「？ まだ 体も洗ってないのに？」

「…………… つ、浸かるだけで満足だよ……………」

そういつて アルフはそそくさと温泉から出ようとした

おやおやゝ アルフっ たらもしかして……

「待って アルフ」

もにゅ

「うわ！？ な、なんだい！？ って いうか 何で胸を触る！
」

今、私はアルフの後ろからおもいつきり胸を鷲掴みにしている
……くっ！！ 相変わらず何て弾力！！

「………… アルフ………… もしかして あなた…怖いんですか？」

「なっ！！？？ そ、そんなわけないだろ！！」

「今どもりましたね？」

「ど、どもってなんかないよ！！ いいから 話しな！」

「ふふん 逃がしませんよ！」
もみもみもみ

「ちよっ………… ばか！………… やめ………… あはは…くすぐった………… や、
やめ………… んっ………… あっ………… んん…………
フー

「ひゃっ！ み、耳に息を吹き掛けるな………… あっ…………… ちよっ……………」

ペロッ

「ひゃわ!?!」

カプッ

「ひう!?!」

……中々 しぶといですねえ
こうなったら……

私は片手をゆつくりと下におろした

「ま、待て!! そ、そこは………や、やめ………」

これでトドメです!!!!

「あああ!!?!?!」

バタッ

ついに アルフはその場に力なく倒れた

「はぁ…はぁ…はぁ…デ、デルフ………」

アルフは倒れたまま私を睨んでくる

………少し………やりすぎました………

「じゃ、じゃあ 体を洗いましょうか………フェイトちゃん行きま
すよ

「えっ！？あつ うん」

フェイトちゃんは顔を真赤にしながら 温泉からでた …………… フェイトちゃんには刺激が強かったかしら？

「アルフゝ 立てますか？ 無理なら手を貸しますよ？」

「くっ デルフ 後で覚えてなよ」

「あ、あはは そ、それにしてもやつぱり あそこが弱点だったんですね」

「う、うるさいよ！！いいかい この事は誰にも言っんじやないよ！？」

…………… 言わなくても誰だって知ってると思いますけどね 動物の弱点……………

ゝデルフサイドアウトゝ

ゝリンクサイドゝ

「ああ 気持ち良い」

旅館内を一通り見て回った俺は 途中で発見したマッサージ機でくつろぎまくっていた

ヤバイなこれ マジヤバイって どれくらいヤバイかっていうとマ

ジャバイ

ああ 何だか 眠くなってきたなあ

……いやいや ここで寝るわけには……寝るわけ……には……

「……………くく……………??」

くリンクサイドアウト

くなのはサイド

私は今、すずかちゃんとアリサちゃんの三人で探険をしています
結構広くて迷いそうなの

「せっかく 卓球台があるのにすずかもなのはもしないなんて」

「ごめんね アリサちゃん 私 そういつの苦手で……」

「にはは 私も苦手なの」

「だから 私が鍛えてやるって言うてるのに……………んっ?」

「どうしたの?アリサちゃん」

「いや、あそこに座ってる子……………寝てるの?」

「「えっ?」「」

見ると、もう動いていないのにマッサージ機に座ったままの子がいるの

「あんな所で寝たら風邪引いちゃうよ」

「っていうか そのまま寝ちゃいけないって貼り紙に書いてあるのに」

確かに マッサージ機の横には貼り紙がしてある

………起こしてあげないと

「ちょっと なのは どこ行くのよ」

「あの子 起こしてあげてくる」

私はその子の元に駆け寄った

………そして………すごく驚きました？

「……………リンクくん？」

「なのはサイドアウト」

第十二話 頑張れ（前書き）

早くもネタぎれ

第十二話 頑張れ

「リンクサイド」

俺は今 目の前の状況に困惑していた

「……………高町ちゃん？」

「……………リンク君？」

そう目の前に高町なのはがいる

……………あれ？おかしいな 何でここに高町なのはがいるんだ？
……………これは 夢か？……………

「リンク君？」

「えいつ？」

夢かどうかを確かめるため俺は 高町なのはの頬を引っ張った「ふええ！？」 ふぁひふうふうふぉ！？（なにをするの）「

「……………いや 夢かどうかを確かめようと思って」

「何で 私なの！？」

「いや 何となく……………」

「何となくって……………ひどいよ リンク君！！」

「ごめんなさい……………じゃあ 俺は これで」

俺は高町ちゃんに頭を下げ その場を離れようとしたが……………

「待つて！！ リンク君に聞きたいことがあるの！！」

手を捕まれ邪魔をされてしまった

ちい！！ やはりきたか！！

「…………聞きたいことっていうのは あの黒い魔導師の事…………どうしてあの子はジュエルシードを集めているの？」

「…………悪いな 俺もよく知らない……………」

…………詳しくな…………

「えっ！？ リンク君 あの子に協力してるんでしょ？」

「……………例え知っていたとしても 人の秘密を話すのは趣味じゃない

どうしても気になるなら 本人に聞いてくれ」

「……………」

俺の言葉に高町ちゃんは悲しそうに俯いてしまう

「……………逆に聞くが 何であの子の事が気になるんだ？
あの子は 君の敵だろ？」

「……………何となく……………何となくだけど あの子の目、とても悲しそだった……………それに……………うまく言えないんだけど あの子の事 敵だとは思えないの」

「……………そうか……………それで高町ちゃんはどうしたいんだ？」

「……………私は……………あの子とお話したい……………お互いの事 もつとよく話し合えば 分かりあえると思うの」

……………すごいな

自分を攻撃してきた相手にたいして 分かりあいたいと思えるなんて、本当にすごい

「……………だったら、挫けない様にな……………例えその子から何十回拒絶されても その気持ちを忘れるなよ……………」

俺は高町ちゃんの頭を優しく撫でながらそういった

「……………あ……………うん／＼／」

高町ちゃんは少し照れ臭そうに目をつぶる

「頑張れ！！高町ちゃん」

「……………さつきから気になってたんだけど、どうして 高町ちゃんなの？……………前は なのはって 呼んでくれたのに……………」

「……………？ 別に呼び名なんて何でもいいだろ？」

「じゃあ 私の事はなのはって呼んで」

「だが断る！！」

「何で！？」

「高町ちゃんが フェ……………あの魔導師と友達になったら呼ぶよ」

「友達に？」

「ああ なりたいんだろ？」

「……うん なりたい」

「うんうん 頑張れよ 応援してるぞ」

なでなで

「う、うん ありがとうなの／＼」

「……… なんだか 良い雰囲気だね………」

「ていうか なのは 私達のこと忘れてない？」

「……… 何の話をしてるんだろ なのはちゃん 何だか嬉しそう」

「……… それよりも なのはに男の子の知り合いがいたなんて
ずかしてた？」

「ううん 知らない……… も、もしかして なのはちゃんのか、
彼氏……かな」

「か、か、彼氏！？ な、何行ってるの 小学生で恋人なんて………」

「で、でも 頭を撫でられた時のなのはちゃん とっても幸せそう
だったよ

顔も 赤いし………」

「……… そういえば、学校でも ボーッとしてる時があるわね………」

「……」

「……うん お姉ちゃんもたまにボーツとしてる時があるよ……」

「……でも なのはよ なのは あの鈍いなのはに彼氏何て信じられないわ」

「……でも、優しそうな子だよ……」

「……すずか もしかして、ああいうのが好みなの？」
「ええ！！ ち、違うよ」

「……魔の三角関係ね……」
「ち、違っつてばあ」

第十二話 頑張れ（後書き）

原作の展開を忘れた

第十三話 どうしよう（前書き）

グダグダです

今に始まった事じゃないか……………

第十三話 どうしよう

「リンクサイド」

「リンク君 紹介するの
私の友達の……………」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです」

話を終えた後、俺はすぐにその場を去ろうとしたが、何か後ろの二人が盛大に勘違いしていたので、とりあえずは 自己紹介することにした

「俺の名前はリンク よろしくね バニングスちゃん 月村ちゃん」

「私の事は アリサでいいわ」

「私の事もすずかでいいよ 名字で呼ばれるのなれてないから」

「あ、うん わかった」

確かに 月村ちゃんとはかく バニングスちゃんって呼ぶのは違和感がある ていうか 噛みそう……………」

「……………」ところで、あんたに聞きたいことがあるんだけど……………」

「……先に言つとくけど 高町ちゃんとは恋人同士でも何でもないからな」

「えっ？ そうなの？……ほら 見なさい すぐか
やっぱり あんたの勘違いよ」

……いやいや 勘違いも何も そんな要素どこにもなかったろ

「にやはは リンク君 友達だよ」

高町ちゃんも苦笑している

「でも 学校じゃ見かけない顔ね」

……マズい……

当然だが 俺は学校なんて行つてない

ここで 色々聞かれるのはマズい

……仕方がない

「ああ えつと 俺は今 この辺には住んでないからね……」

「……今つて事は 昔は住んでたの？」

「うん 三年くらい前まではね

高町ちゃんとは 引つ越す前に公園で知り合つたんだ まあ 1週
間くらい遊んだただけだね」

当然これは嘘だ 確かに三年くらい前まではここに住んでいたが
今は違う

と言つても 町から森に移つただけなんだが………それにしても
よくもまあ これだけの嘘を平気で吐けるもんだ………

自分自身が嫌になる……………でも、今はしょうがない 魔法の事は当然秘密だろうし 昔の知り合いを装った方が誤魔化しも聞く……………と思う

後は 高町ちゃんに話を合わせてもらおう
そう思っ て 俺は高町ちゃんの方を見た
……………だが

「……………」

高町ちゃんは 目を丸くして俺の顔をじっと見つめていた
……………いや 嘘だからな
君まで 本気になるなよ!?

「……………高町ちゃん? どうかした? ……………まさか!! 忘れてしまったのか!? 俺達の出会いを!!」

俺はそういつて ショックを受けたように大きく仰け反る
……………ちよつと大袈裟過ぎかな……………

「ふえ? も、もちろん 覚えてるよ」

高町ちゃんはそういつて何度も頷く
良かった 察してくれたか ……………何か アリサちゃんとすずかちゃんの視線が痛いけど……………

「……………何か怪しいわね」

「あ、怪しい? どこがかね?」

「……………何か 隠してない?」

「べ、別に」

くっ！！ この二人 結構鋭い！！

「本当だよ アリサちゃん すずかちゃん リンク君とは 小学校にあがる前にお友達になったの」

少し焦っていた俺をフォローしてくれる高町ちゃん 助かった
そして 意外と嘘が上手いな

「…………… そうなのはがそういうなら信じてあげるわ」
俺は信用ゼロですか？

「ところで、リンク君も家族と温泉旅行なの？」

「うん デル…………… えっと んっと…………… お、お姉ちゃんが福引きで当ててね…………… 高町ちゃん達は？」

「私は家族全員できて すずかちゃんはお姉ちゃんとメイドさん達と来てるの」

…………… はて、今 メイドと言ったか？

…………… すずかちゃんってもしかして お嬢様？

…………… お嬢様…………… そして 高町ちゃん…………… まさか…

「ね、ねえ すずかちゃんの家って結構大きかったりするの？」

「なによ 急に」

「いや メイドがいるって事は、もしかしてすずかちゃんってお嬢様なのかなあって思ったりしちゃったり……………」

ヤバイ 動揺して変な口調になっちゃったりしてる

「うん 大きいのかな？……多分」

「すずかちゃんの家 猫さんがたくさんいるんだよ」

はうあ！？ ま、ま、間違いない あの家だ

巨大子猫（？）がいた豪邸だ なんと 偶然

「そうなんだあ お金持ちなんだね」

「……………そうなのかな」

…………… 何だか すずかちゃんの様子がおかしい
人のこと 言えないけど……

「ちなみに 私の家もあんだの言うお金持ちよ…………… まっ自慢にはな
らないけどね」

そういうアリサちゃんの表情にもどこか影がある
それと、言葉に刺がある

「…………… ねえ リンク君

これから私達 お土産を買いに行くんだけど一緒に行かない？」

「…………… お土産？」

「うん いこ」

そついつて高町ちゃんは 俺の手をつかんで引つ張る

「ちよっ 高町ちゃん？」

「アリサちゃんもすずかちゃんも早く早く」

「えっ？うん」

「ちよつちよつと 待ちなさいよ なのは」

有無を言わさぬ高町ちゃんに俺はさすすべなく連行された……

くリンクサイドアウトく

〔部屋内〕

「……………遅い 一体何をしてるんでしょうか リンクは」

「……………しょうがにゃい 俺が探しに行くにゃ」

「いえいえ 私が捜しに行きます（＾－＾）」

「……………じゃあ 私はジュエルシードを探しに行くね」

「まって フェイトちゃん それは 夜に行きましょう 今はリンクを捜さなくちゃ そして、伝えなくちゃ ジュエルシードが近くにある事を……………」

「別に あいつがいなくても私とフェイトさえいれば問題ないさ」

「いえいえ それが問題あるんですよ そのジュエルなんとか 旦那様がいないとちよつと回収するのが難しいです」

「……………どういうこと？」

「…ジュエルシードがある場所にちよつと厄介な奴等がいるんですよ」

「厄介な奴等あ？ 誰がいるんだい？」

「……………天狗っていうちよつと厄介な妖怪です」

「ふん そんな奴等倒しちまえばいいじゃないか……………あの 白い奴も一緒に」

「……………ここは奴等の縄張りにゃ 好き勝手すると後で痛い目を見るにゃ」

「なんだい びびってんのかい？」

「……………一つ言っておく ジュエルシードを封印したらすぐにその場からはにやれる 天狗は特によそ者を嫌うにゃ」

ユウは真剣な表情でフェイトとアルフに忠告する

「今回は ジュエルシードの位置はほとんど特定されてる 俺達は手出しはしにやいにゃ」

「……………ふん 初めから私とフェイトだけで 十分さ」

アルフはそういつて部屋を出ようとする

「アルフ どこ行くの！？」

「温泉」

アルフは一言そういつて部屋を出ていった

「はぁ やれやれにや」

「相変わらず 仲がよろしくないですね 貴方たちは」

「ダメですよ ユウさま あんな言い方は」

「……………ごめんね ユウ」

フェイトは謝りながら ユウの頭を撫でる

「……………忠告はしたぞ 後は勝手にやれにや」

ユウは 冷たくそういうと丸まって寝てしまった

「っにしても リンクは何処にいらっしゃるでしょう？」

「……………もうほっとけにや どうせ あの高町にやんとかって奴と一緒にいるんだろ」

「今すぐに あのたらしを拉致ってきます！……！」

ユウの冗談にデルフと玉藻は 一瞬のでいなくなった

「……………娘 お前はいけにやいぞ」

「……………だめ……かな」

「今 行って本当に高町とあつたらどうする

まあ それでも俺は構わんが」

「……………か、隠れて、とかはダメだよね？」

「……………お前は目立つだろ」

「……………うう」

「はあ やれやれにや 見つかってもしらにやいぞ」

そういつてユウは 起き上がるとフェイトの肩に乗った

「……………えっ？」

「……………にやにしてる 早く扉をあけるにや」

「あっ うん」

「……………乗り心地は……………40点かにや……………」

採点が低い事に 何だか軽いショックを受けながら フェイトは
部屋のドアを開けた

「……………ああ イライラするねえ」

温泉に向かっていたアルフは先程のユウとの会話を思い出しながら
ぶつぶつと文句を言った

「…………厄介な妖怪？痛い目を見る？ ふん どんな奴が来ようと私のご主人様がまけるもんか」

超不機嫌オーラを出しながら廊下の真ん中を歩くアルフに他の人達は全員道を開けていた

「…………ふん どういつもこいつも 根性がないねえ……………ん？」

どこかのお偉いさんみたいになっているアルフの前方に 四人の子供達が話ながら歩いてくるのが見えた
リンク達である

（あれは確か この前の白い奴…………それに…………リンク！？）

「……………ん？ あっ」

アルフの存在にリンクも気付く

「……………」

「……………へえ 良い度胸してるじゃないのか」

アルフは不敵に笑いながらリンク達に近付いていった

第十三話 どうしよう（後書き）

基本的には極力原作のところはカットするか
オリジナル要素を強くするかのとちらかにします

……………ていうか 原作あんまり覚えてない

何かご指摘があれば遠慮なく言ってください

はあ 完結できるかな？

第十四話 フラゲ乱立はいつか刺される(前書き)

進みが遅いです

第十四話 フラグ乱立はいつか刺される

くリンクサイドく

俺は今 高町ちゃん達と旅館の廊下を歩いていた
ちなみに、ユーノも一緒

（酷いよ 僕がいなくても話が進んでいくなんて……）
ごめんユーノ

完全に忘れてた……作者が……

「まあ 元気出せって……… なっ？」

（うん ありがとう………）

ああ かなり落ち込んでいるな

こりゃ そつとしていたほうがいいかも………

ところでユーノの声って どこかで聞いたことのあるような……
ないような………

いや、それを言ったら 高町ちゃん達も同じか……… みんな 良い
声してるよね

そんな事を考えていると 前から視線を感じた
見てみると 不機嫌オーラを出しているアルフがいた……… アルフ
様がこつちを見ている

しかも、不敵に笑ってこつちに近付いてきた

「君かい うちの子をあれしてくれたのは」

「えっ？」

「ふーん あんまり賢そうでも強そうでもないし……ただのガキンチョにしか見えないねえ

……その奴みたい……」

いきなり、ボロクソに言われる高町ちゃん……そして最後に俺を一瞥
つて 誰がガキンチョだ こらぁ!!

俺は キツとアルフを睨むが軽く無視された
………こんなにやろう

「………なのは、知り合い？」

「ううん 知らない人」

「ちょっとあんた いきなり失礼じゃない」

そういつて高町ちゃんを庇うように前へでるアリサちゃん
うほ カッコいい

「あっはっはっは

悪い悪い 人違いだったよ」

そして 高笑いするアルフ

「酔っ払ってんのか？」

お前も賢そうには見えないぞ」

「うるさいよ!!」

ゴンッ!!

「むぐあー!!」

超いてえ!! 我が頭部ダメージ40!!!

「てんめえ いきなり殴るか普通!!」

「ふん!! ガキンチョが 生意気言っんじゃないよ!!」

「お前だつて 見た目そんなんでも 対して生きてないだろ」

……狼だし……

「あんたよりは 年上だよ ガキンチョ」

「また ガキンチョって言った!! あんまり人をバカにしていると
……」

「してるど、なんだい？」

「その尻尾握るぞ（ボソ）」

「んなつ!!？」

俺の言葉に少し顔を赤らめてたじろぐアルフ
ふふん やはり尻尾が弱点だったか

「リンク あんたの知り合いなの？」

「えっ!?! あっ まあね」

「もしかして お姉ちゃんか誰か？」

「えっ！？えっと そんなところ……………かな？」

しまった！！ ついいつもの調子で喋ってしまった！！

「ふーん お姉ちゃんねえ」

何かアルフがニヤニヤしてる
やめろ その笑い方

そして、隣の高町ちゃんを見る

…………… 何だか 高町ちゃんの顔色が悪くなっていく

（おい！！ 何を話してる！）

（！？ あんた 念話使えたのかい！？）

（いや これは神通力だ）

（じん…………… なんだって？）

（神通力だ）

（それも 霊力って奴かい？）

（まあね っで 何を話した）

（別に ただ 少し忠告しただけさ…………… それと……………）

（それと？）

（あんたが こっち側だって事も話しといたよ）

（……………なに？ おい どういう事だ！？）

「じゃあ 私は失礼するよ じゃあね？」

俺の言葉を見無視して、その場を後にするアルフ

（あつ！！こら まて！！）

俺はアルフを追いかけてようとしたが……………隣にいる高町ちゃんの表情を見て諦めた

……………そんな泣きそうな顔 するなよな……………

今の高町ちゃんはとても不安そうで、今にも泣きだしそうだ

……………魔法少女だって言っても、元々は普通の女の子だもん……………

（……………一応言つとくけど フェイトを裏切ったら許さないよ）

そういつてアルフは 一瞬こっちを振り返り また 歩き出した

「何よ あの人 昼真つから酔っ払ってんじゃないの？」

「……………ああ ごめんね
うちの姉が……………」

「べ、別にあんたが謝らなくてもいいわよ」

「なのはちゃん 大丈夫？」

「えっ？ う、うん 大丈夫だよ」

「じゃあ 気を取り直して お土産買いにいくか」

「そうね」

それから、俺たちはお土産を買いに行った

…………… 何だか 途中いくつもの視線を感じたが（殺気含む）あれ
は何だったんだろう……………

第十五話 ジュエルシード 封印

くリンクサイドく

「けえったぜ みんな！」

……誰もいない……ちょっとさみしい

「みんな 出かけたのか？」

あれから 随分たつ 流石に温泉には入ってないだろう……何にしる 一人じゃ暇だし……

「……………ねるか……………」

「……………永遠にね……………」

殺気……！！

シュッ

ブンッ……！！

殺気を感じ 咄嗟に頭を下げた瞬間 俺の頭上を何かが通過した……も、物凄い早さだ……風が後から来た……

俺は急いで前転をし、距離をとって後ろを振り返った

「……………デルフ？」

そこには 先頭にデルフ 少し離れた所に 玉藻、フェイト、そし

て 何故かフェイトの肩に乗っているユウがいた

「ちっ 外しましたか……」

デルフは、忌々しそうに言いながら、剣を鞘にしまっ……って
ちよっと待て！

「剣！？ それ当たったら即死じゃねえか！！！」

「大丈夫 ちゃんと峰打ちですから」

「一応言つとくけど それ峰ないからな……」

……刀じゃなくて 剣だし……

「いや それよりも いきなり不意打ちなんてどういっつもりだ！
？」

「可笑しな事を言いますね 不意打ちっていうのは いきなりやる
もんですよ？」

……そりゃそうだ……じゃなくて！！

「いきなりどういっつもりだって聞いてんだよ！！！」

「自分の胸に聞きなさい！！」

「えー！！！！？」

「旦那様 あなたの罪を数えてください」

「えっ！？ちよっと待って！！本当に訳が分からないよ！？ た、
助けて フェイト！！！」

俺はフェイトに助けを求めた……

プイッ

っが フェイトは拗ねたようにそっぽを向いた

……… えっ？ 何で？ フェイトまで怒ってる？

何か少し頬を膨らませてるし……… ふむ かわいい …… って

そんな場合じゃない！！

「ユウ！！ ユウ！！！！ 助けて！！！！」

今度はユウに助けを求める

「ふう……………」

ユウはため息を吐くとフェイトの肩から飛び降り………そして……座
布団の上で丸まった……………うそん……

「時空の彼方に消え去りなさい！！」

「まつ！！ ちょっと 待って！！ あっ！！ 優しくして！！
アッ………！！！！」

そして 俺の意識は途絶えた……………

くリンクサイドアウトく

そんなこんなで夜

「じゃあ 行ってくるね」

「はあくい 行っってらっしやくい」

「何か あれば助っ人に行きますから」

「…………私とフェイトだけで十分だよ」

フェイト達は ジュエルシードを回収するために旅館の裏山に向かった

「大丈夫でしょうか…………」

「忠告はした 後はあいつらでニヤンとかするだろう」

「ううん はっ…!」 (；)!! 一瞬 花畑が見えた…!」

「あら リンク おはようございます……………いえ こんばんはですかね」

「…………えっ!? もう夜!?」

「はい () さあ 旦那様 一緒に温泉に入りましょう」

「…………やだよ……………ところで フェイト達は?」

「ガーン!! (;)」

「フェイトちゃん達なら ジュエルシードを回収しに行きましたよ」

「ジュエルシード!? あったのか!? この辺りに」

「…………後 厄介ニヤ事に その辺は天狗の縄張りニヤ」

「…………マジで？」

「マジです」

「…………ヤバくないか？」

「まあ 大丈夫だとは思うんですけど……………」

「…………一応 様子を見てくる！！」

リンクはそういつと、外に飛び出した

「あっ！！ こら！！ もう せっかちですねえ」

「どうする？」

「私達も 行きましょう！！」

「もし 襲ってきたらその天狗共 狩ってもいいのかニヤ？」

「…………襲ってきたら…ね」

デルフの言葉に極悪な笑みを浮かべるユウ

「ニヤら 行くニヤ」

「きまりですね ほら、何時迄も落ち込んでないで 行きますよ」

「…………はぁい（、、）」

「この辺りに……………」

「しかし、なんだって あんたのお母さんはロストログアなんてほしがるんだ？」

「……………分からないけど… 母さんが 必要としてるなら 集めてあげなくちゃ」

「……………なあ フェイト……………っ！？……………誰だ！？」

アルフがフェイトに何かを聞こうとした時 不意に茂みの中から動く物体を見つけた

「ああ フェイト アルフ 俺だよ 俺俺」

リンクが現れた

たたかう

痛み付ける

折る

「ちょっと 何このコマンド！！ ていうか 折るって何だ！？」

「何だ あんたか……………何か様かい？」

「いや 見に来ただけ（^- - ^）」
ズルッ

てつきり「手伝いに来た」 何て言うかと思ったアルフは リンクの言葉にずっこけそうになった

「帰れ！……！」

「何だよ いいだろ？別に 邪魔はしないからさ」

「……………もしかして 心配してくれたの？」

「んな！？ にやにをばかな！」

…………… 噛んだ……………

「……………へえ」

リンクの態度にアルフは悪戯っぽい笑みを浮かべる
「な、何だよ」

「いや 別に」

「……………ああ もう いいから 早く封印して帰るぞ」

二人の視線に耐えられなくなったリンクは 照れ隠しに声を荒げる

「ふふ」

「あっははは」

そんなリンクに フェイトは小さく笑い アルフは爆笑した

「それじゃ、リンクもああ 言ってる事だし……………」

「うん 封印するね」

フェイトは ジュエルシードを発動させ 完全に位置を特定した
ピクッ

「……………来たか……………」

ジュエルシードを発動させた瞬間 リンクはこちらに近付いてくる
何かを察知した

「……………フェイトッ アルフッ 何だか大丈夫そうだから 俺 戻
ってるなッ」

「うん わかったッ」

「……………さて、と」

リンクは フェイト達にそう告げると旅館とは逆方向に走っていつ
た……………

第十五話 ジュエルシード 封印（後書き）

次回 リンク達VS天狗

フェイトVSなのは

ーノ

アルフVSユ

進みが遅くて申し訳ないです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5986v/>

魔法少女リリカルなのは 異能者達の伝説

2011年11月20日02時12分発行